元総社明神遺跡XI

土地区画整理事業に先立つ埋蔵文化財発堀調査概報

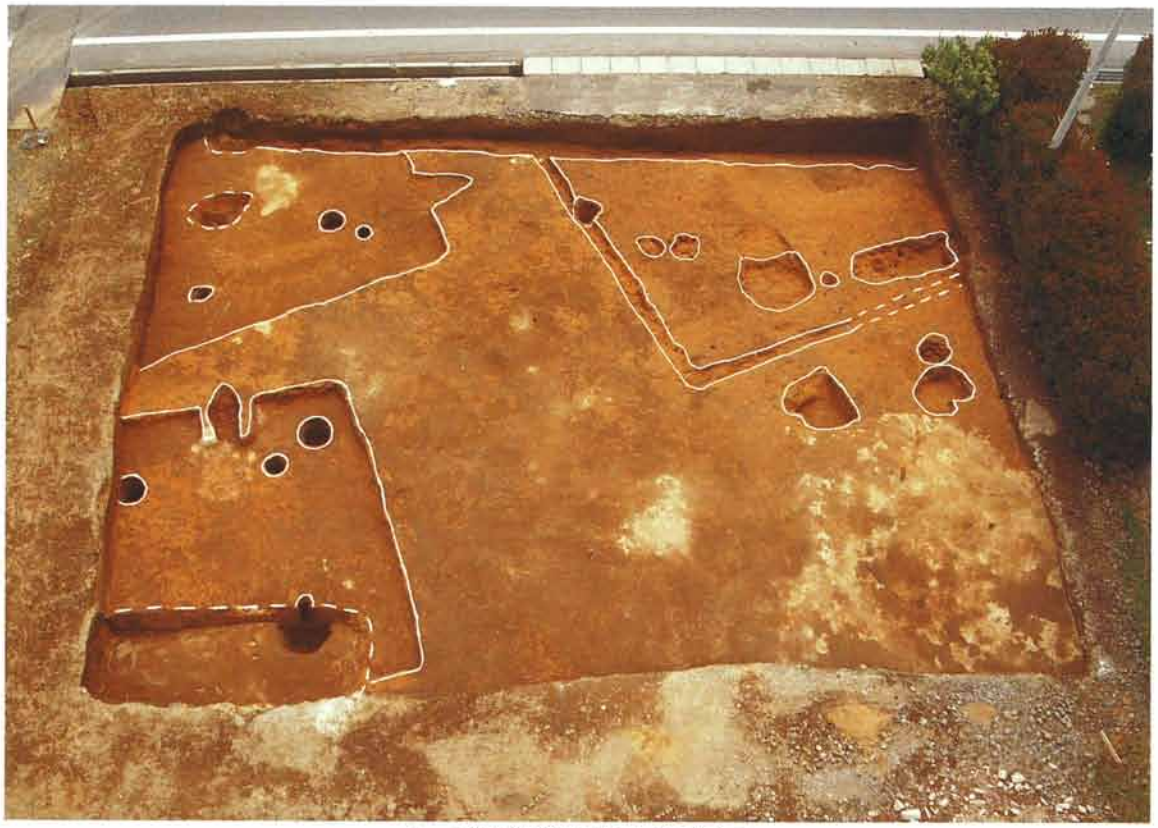
1993

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

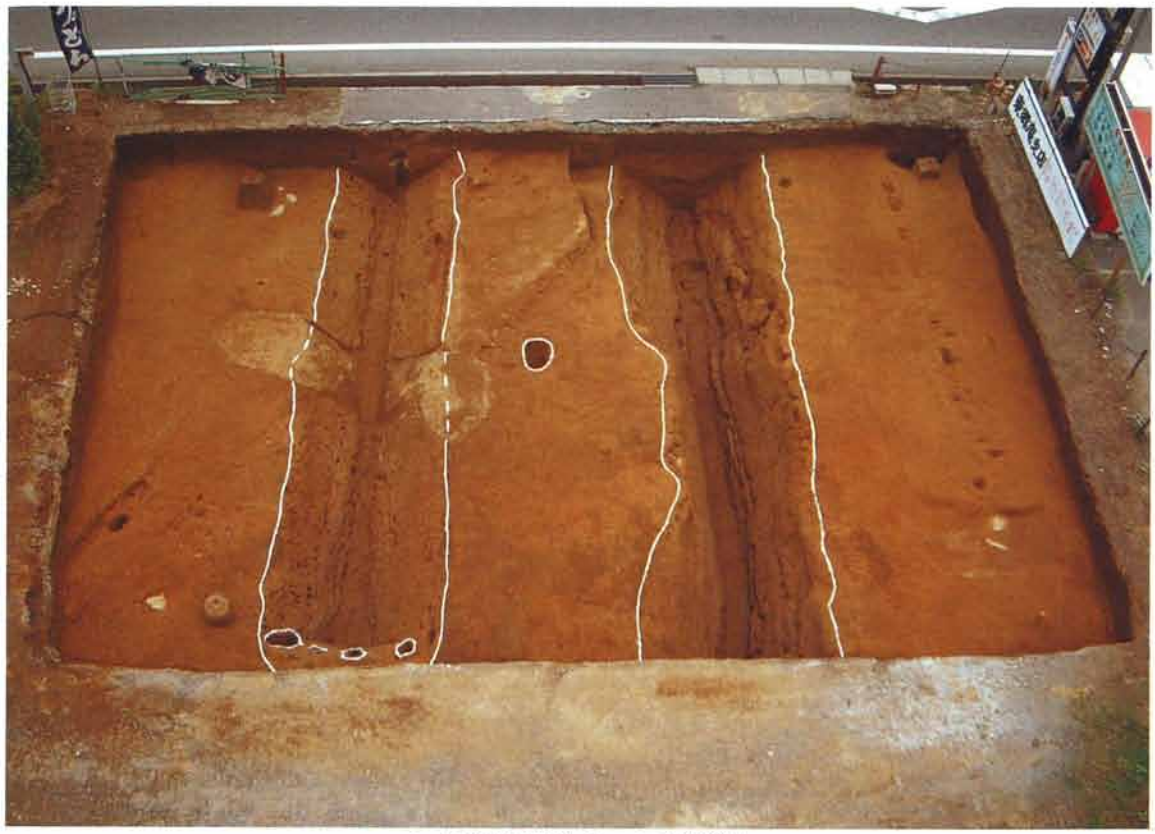
元総社明神遺跡 XI

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

1．元総社明神遺跡と周辺地域



2．元総社明神遺跡αトレンチA区全景



3．元総社明神遺跡αトレンチB区全景

序

群馬県前橋市は、北に関東平野を一望できる雄大な赤城山を、西に榛名山を仰ぎ、坂東太郎として名高い利根川や詩情豊かな広瀬川の清流が市街地を貫流する、水と緑にあふれた美しい県都であります。

遠く古墳文化の時代には東国の中心とも言える文化を築き、続く律令政治の時代に入ると元総社に上野国府が置かれ、山王廃寺、国分二寺が立ち並ぶ一大政治文化圏が形成されました。さらに近世では、利根川をはさんで前橋城と総社城が築造され、近代に至っては生糸の主要生産地として繁栄を生み出してきたように、前橋には歴史が織り成した様々な情景が満ちています。

元総社明神遺跡が所在する元総社地区では、近年、都市基盤整備の必要性が高まり、土地区画整理事業が実施されてきております。それに伴い、この地区が古代上野国の中心地域であったと推定されることから、確認調査の結果協議により、昭和57年度より開発予定地の道水路部分を中心として事前の発掘調査を実施してきており、本年度で第11年次を迎えました。

本年度は、既存道路の拡幅箇所の調査を実施しました。限られた範囲の調査でありましたが、住居址・溝跡・井戸址等が検出され、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、交通量の多い幹線道路に面する市街地での発掘調査ということで、安全対策等大変神経を使いましたが、元総社第三明神地区区画整理審議委員の方々、前橋市区画整理第一課の担当者及び隣接住民の方々、さらに発掘調査・整理作業に従事していただきました作業員の方々の厚い御理解と御協力を得まして、無事調査を終了することができましたことに深く感謝申し上げます。

本報告書が元総社地区の歴史を解明する一助となり、また考古学研究の参考となれば幸いに存じます。

平成５年３月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団
団　長　　有　坂　　淳

例　　言

1．本報告書は、前橋都市計画事業元総社（西部第三明神）地区土地区画整理事業
施工者 前橋市　代表者 前橋市長 藤嶋清多が実施する区画整理事業に係る元総社明神遺跡発掘調査報告書である。

2．遺跡は、群馬県前橋市総社町総社3577－1番地ほかに所在する。

3．調査は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団　団長　有坂　淳が施工者　前橋市　代表者　前橋市長　藤嶋清多と委託契約を締結し実施した。
調査担当および調査期間は以下の通りである。

発掘・整理担当者　　狩野吉弘・大山知久（前橋市埋蔵文化財発掘調査団調査係）
発掘調査期間　　平成4年5月6日～平成4年7月22日
整理・報告書作成期間　　平成4年12月1日～平成5年3月20日

4．本書の原稿執筆・編集は狩野・大山が行った。整理作業をはじめ図版作成には、岩木賢一・岩木　操・大田一郎・岸フクエ・住谷文彦・渡木秋子・湯浅たま江・湯浅政夫・湯浅道子・湯浅有紀の協力があった。

5．下記の専門的分野については、次の機関ならびに方々のお世話になった。（敬称略）
地質・地形：有限会社古環境研究所　　瓦：木津博明（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団）
石器・石材：飯島静男

6．発掘調査で出土した遺物は、当調査団より前橋市教育委員会に保管責任を依頼し、前橋市教育委員会文化財保護課で保管されている。

凡　　例

1．挿図中に使用した北は座標北である。

2．挿図に建設省国土地理院発行の1/20万地形図（長野・宇都宮）と1/2.5万地形図（前橋）を使用した。

3．本遺跡の略称は4A59である。

4．各遺構の略称は次の通りである。
H…古墳・奈良・平安時代の住居址、I…井戸址、D…土坑、W…溝址

5．遺構・遺物の実測図の縮尺は次の通りである。
遺構　　住居址・土坑・井戸址・溝址…1/60、全体図1/200
遺物　　土器・石器…1/3、瓦…1/3、石製品…1/3、1/6、古銭…1/2

6．スクリーントーンの使用は次の通りである。
遺構断面図　　火山灰…濃点、構築面…斜線
遺物実測図　　炭化物…斑、施釉範囲…霧、須恵器断面…黒塗り
灰釉陶器断面…濃点、土器使用痕…細斜線

── 目　　次 ──

序

Ⅰ　調査に至る経緯 …… 1

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1　遺跡の立地 …… 1

2　歴史的環境 …… 2

Ⅲ　調査の経過

1　調査方針 …… 5

2　調査経過 …… 6

Ⅳ　層　　序 …… 7

Ⅴ　調査区の遺構と遺物

1　A　　区 …… 8

2　B　　区 …… 12

3　C　　区 …… 13

Ⅵ　成果と問題点 …… 20

付　　編

元総社明神遺跡Ⅺの地質調査報告書（有限会社古環境研究所） …… 24

元総社明神遺跡出土の瓦類に就いて（木津　博明） …… 28

図　　版

口 絵　1　元総社明神遺跡と周辺地域
口 絵　2　元総社明神遺跡XIαトレンチA区全景
口 絵　3　元総社明神遺跡XIαトレンチB区全景

PL.
1　A区の遺構（1），深掘りセクション
2　A区の遺構（2）
3　A区の遺構（3）
4　A区の遺構（4）
5　B区の遺構（1）
6　B区の遺構（2），C区の遺構（1）
7　C区の遺構（2）
8　αトレンチの遺物（1）
9　αトレンチの遺物（2），石器・石製品（1）
10　石器・石製品（2），瓦

挿　　図

頁

Fig. 1　元総社明神遺跡の位置と上野国府 …… vi
2　元総社明神遺跡の調査地点と上野国府学説 …… 2
3　元総社明神遺跡周辺図 …… 4
4　元総社明神遺跡グリッド設定図 …… 5
5　元総社明神遺跡調査経過図 …… 6
6　元総社明神遺跡αトレンチ標準土層図 …… 7
7　蒼海城絵図 …… 23
8　αトレンチ全体図 …… 29・30
9　A区遺構（1）：H－1号住居址 …… 31
10　A区遺構（2）：H－2号住居址 …… 32
11　A区遺構（3）：H－3・H－4号住居址、W－3号溝址 …… 33
12　A区遺構（4）：土坑（D－1～9、11～13号土坑） …… 34
13　B区遺構（1）：W－1号溝址、D－10号土坑 …… 35
14　B区遺構（2）：W－2号溝址 …… 36
15　C区遺構（1）：H－5・H－6号住居址、I－1・I－2号井戸址 …… 37
16　C区遺構（2）：土坑（D－14～33号土坑） …… 38
17　C区遺構（3）：土坑（D－34～52号土坑） …… 39
18　A・B区出土遺物 …… 40

Fig. 19　B・C区出土遺物 …… 41
20　A区出土石器・石製品 …… 42
21　B・C区出土石器・石製品 …… 43
22　C区出土石器・石製品 …… 44
23　元総社明神遺跡出土瓦 …… 45

表

頁
Tab. 1　遺物観察表 …… 26
2　石製品・石器観察表 …… 27
3　瓦観察表 …… 28

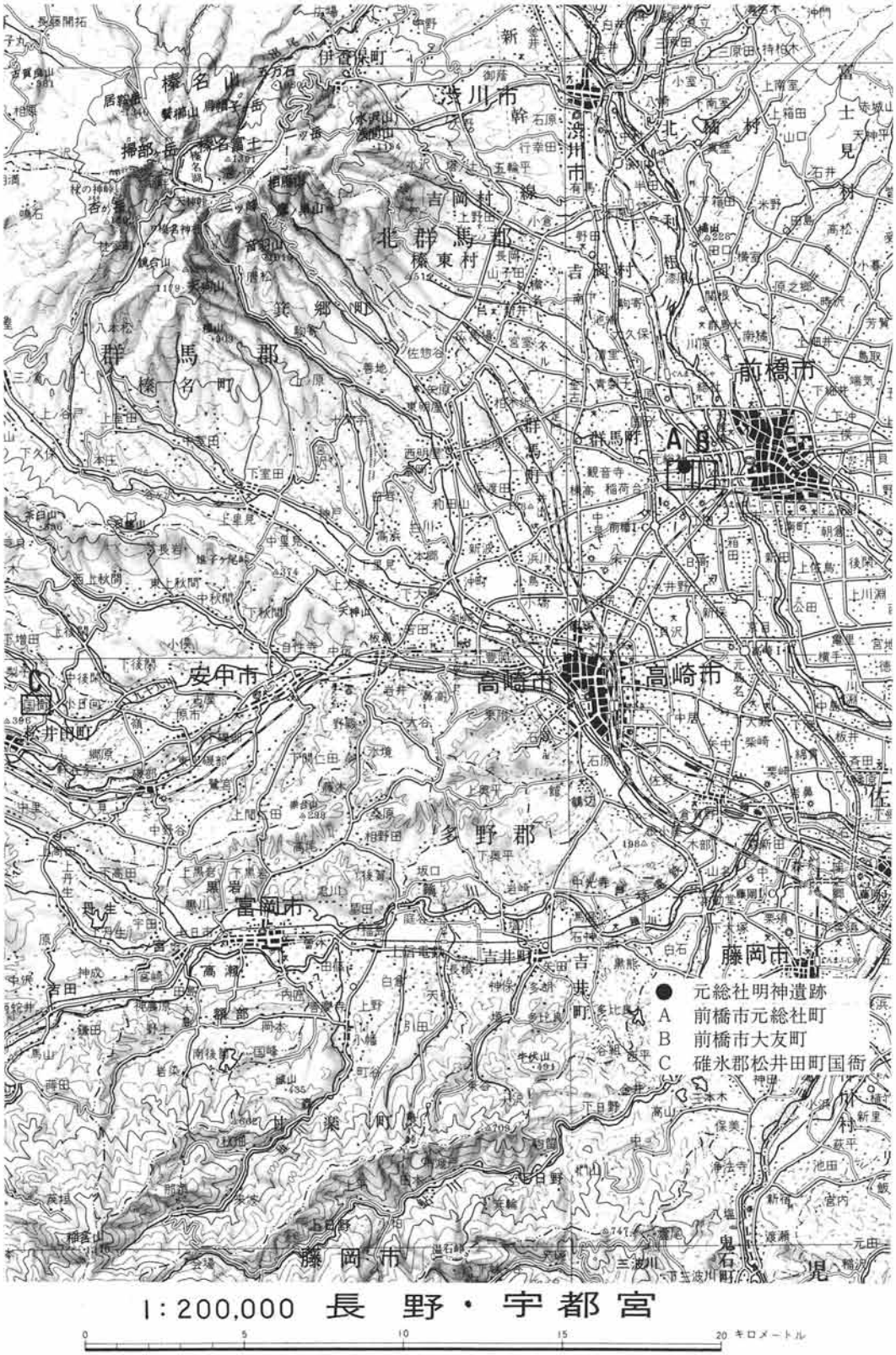


Fig. 1　元総社明神遺跡の位置と上野国府

Ⅰ　調査に至る経緯

昭和48年に計画策定された前橋都市計画事業元総社（西部第三明神）地区土地区画整理事業について、事業担当課である区画整理第一課との協議により、道水路部分を中心に埋蔵文化財の発掘調査を実施することが決定した。

まず、初年度である昭和57・58年度の２ケ年で、前橋市教育委員会が国庫補助金を受けて遺跡範囲確認調査を実施した。その結果、濃密な遺構の分布が認められたことと遺跡地が推定上野国府域に所在することの重要性も鑑みて、再度協議を重ね、昭和59年10月15日付で『元総社（西部第三明神）地区土地区画整理事業に伴う元総社明神遺跡の発掘調査に関する覚書』が代表者前橋市長と前橋市教育委員会教育長との間で締結された。調査は区画整理事業の進捗状況に則して、前橋市教育委員会の組織する前橋市埋蔵文化財発掘調査団で実施することになった。

なお、『元総社（西部第三明神）地区土地区画整理事業に伴う元総社明神遺跡の発掘調査に関する覚書』は、昭和63年４月18日および平成３年１月８日付でその内容を一部変更している。

平成４年度の調査は、委託者から平成４年４月８日付で調査依頼書が提出され、４月28日付で委託契約が締結され事業実施の運びとなった。現地での発掘調査を平成４年５月６日から７月22日まで行い、整理作業は平成４年12月１日から平成５年３月20日まで実施した。

Ⅱ　遺跡の位置と環境

１　遺跡の立地

前橋市は、利根川が赤城・榛名の両火山の裾合谷を経て関東平野を望むところに位置し、地形・地質の特徴から、大きく北東部の赤城火山斜面、南西部の洪積台地（前橋台地）、両者の地溝状をなす沖積低地（広瀬川低地帯）、現利根川氾濫原の４地域に分けられる。

元総社明神遺跡の立地する前橋台地は、約24,000年前に浅間火山爆発によって引き起こされた火山泥流堆積物とそれを被覆するローム層（水成）から成り立っている。西は、前橋市の北西端にあたる清里地域で榛名山麓に広がる相馬ケ原扇状地と移行部を形成し本遺跡地までおよんでいる。東は、広瀬川低地帯と直線的な崖で画されている。微地形的に多少の起伏はあるものの、ほとんど平坦台地面といえよう。前橋台地面の水系をみると、榛名山水系の諸河川が裾野を南東方向に開析し、前橋台地面を刻んで細長い微高地を作り上げている。総社・元総社付近の染谷川や牛池川は、微高地との比高３～５ｍをもって南東方向に流れている。段丘崖上は高燥な台地で、桑園を主とした畑として利用されてきた。またこの台地上は恰好の居住地であったらしく、古墳時代から奈良・平安時代にかけての多くの遺跡が残されている。

元総社明神遺跡の本年度調査区は、前橋市総社町に所在し、群馬県庁より西へ約２㎞、ＪＲ上越線新前橋駅より北西へ約１㎞の地点に位置している。本遺跡地は、利根川の右岸に位置し、前橋市街地と川を挟んで対峙する形になっている。群馬郡群馬町東牛池沼に発し元総社町南部字落合で染谷川に合流する牛池川の台地上に占地している。この台地の西側は牛池川に向かってゆるやかに傾斜し、その比高は３～４ｍを測り、右岸の段丘上には総社神社が鎮座し、地域の産土神にもなっている。本遺跡地の南側に、国道17号（高前バイパス）、主要地方道前橋・群馬・高崎線（前橋・安中線）、東側に市道大友・石倉線（通称産業道路）、遺跡地内を県道足門・前橋線が走っている。これらの幹線道路を中心にオフィスビルや商店・住宅が建ち並び、原状を明らかにすることはできないが、標高112～117ｍの北西から南東へ向かってわずかずつ傾斜している地形が窺える。

2　歴史的環境

本遺跡地周辺は推定上野国府域として古代史の注目を浴び、さらに中世には蒼海城が築かれた。それらを含めた状況把握をするために、縄文時代から遡って周辺の歴史的環境をみていきたい。

縄文時代では、国分寺中間地域遺跡や産業道路東・西遺跡で検出された前期・中期の集落が筆頭に挙げられ、当地域の縄文文化を考える上で重要な資料といえる。その他に熊野谷遺跡、下東西遺跡、清里南部遺跡群、清里陣場遺跡、中島遺跡、長久保遺跡などが挙げられ、時期的には前期から後期初頭といった範囲でおさえられる。

弥生時代の調査例は少なく、中期後半の環濠集落址である清里・庚申塚遺跡と後期の住居が検出された国分寺中間地域遺跡、桜ケ丘遺跡、下東西遺跡等に散見するだけである。井野川、染谷川流域に比べ格段の差を生ずるのは、本地域が高燥化した土地であることの地形的要因に帰するためであろう。

古墳時代を彩る一大モニュメントとしての古墳が本遺跡地周辺に姿を現すのは、６世紀前半代である。利根川右岸段丘上に、川原石を用いた積石塚である王山古墳が造られる。その後、本遺跡の北約２㎞には、総社古墳群を構成する古墳が連綿と築かれる。まず、国指定史跡で前方部と後円部に石室を有する総社二子山古墳、主軸70ｍを測る遠見山古墳、巨石使用の横穴式石室を持つ愛宕山古墳、県内最終末期と考えられ仏教文化の影響を強く受けた宝塔山古墳と蛇穴山古墳などが挙げられる。宝塔山古墳の南西約500ｍに所在する山王廃寺にみられる石造物群は、宝塔山古墳石棺や蛇穴山古墳石室と同系統の石造技術を駆使して加工されたと考えられている。その共通する技法から時代決定の根拠とされ、白鳳期の建立と考えられる山王廃寺を中心にして、総社・元総社周辺では、仏教文化が古墳文化と併存しながら花開いた様子が窺える。

奈良・平安時代に至ると、上野国府・国分二寺等の建設とあいまって、当地域はいよいよ古代上野国の政治的・文化的中心地としての様相を帯びてくる。国府については８年次にわたる発掘

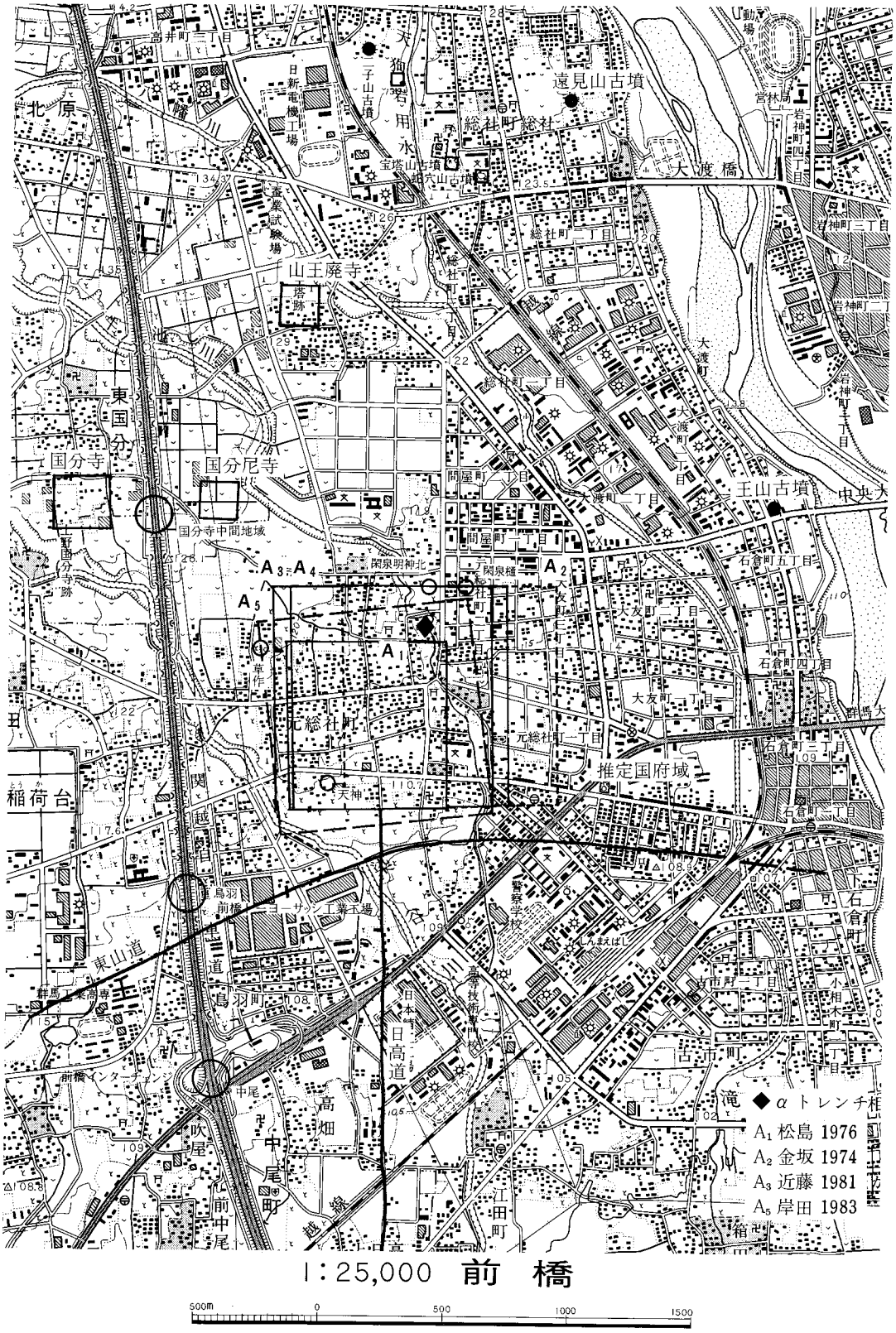


Fig. 2　元総社明神遺跡の調査地点と上野国府学説

調査と戦前からの研究史がある。また国府周辺遺跡では、閑泉樋遺跡、閑泉樋南遺跡、小見遺跡、草作遺跡、大友屋敷遺跡、寺田遺跡、元総社小学校校庭遺跡、天神遺跡、染谷川遺跡、弥勒遺跡等がある。

国府の成立年代は定かではないが、大化2年（646）の改新の詔の二に「初脩二京師一、置二幾内国司郡司……」（日本書紀巻25）とあり、新国司制度とともに国府の大部分が新設されたものと考えられていることから、奈良時代以前には国府がすでにできていたものと推定される。また、『倭名類聚鈔』によれば「上野国、国府在群馬郡……」とあり、その位置として「群馬久留米国分為東西二群府中間国分」の記述がある。これらの文献および総社神社の『上野国神名帳』研究等により、当地域に国府があると想定され、地名や地割りからいくつかの想定案が提出されている（Fig. 1・2参照）。また、国分僧寺の発掘調査は昭和55年12月から始まり、それ以降毎年発掘調査が進められ各種遺構の礎石、築地、堀などが確認されている。国分寺周辺では、関越自動車道建設に伴う発掘調査が進められて、その道筋にあたる中尾遺跡、鳥羽遺跡、国分寺中間地域遺跡等がある。これらの遺跡からは、膨大な数に上る奈良・平安時代の住居址が発掘されている。このことからも、奈良時代から平安時代にかけて当地では飛躍的に集落の拡大した様子が窺われる。

中世には蒼海城が築かれ（1429）、長尾氏の城下となったようである。現在の街路の祖形は、蒼海城の堀割りが道路と変化したものである。また、蒼海城の縄張り自体も国府跡を利用しいるため、国府解明が一層複雑なものとなっている。

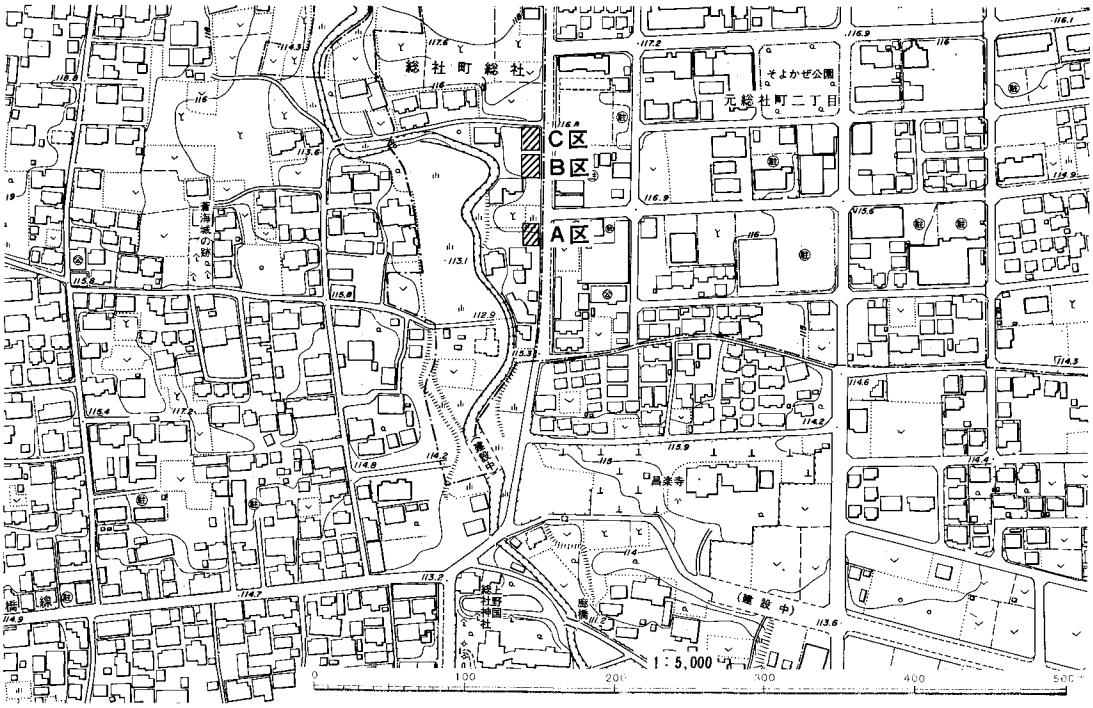


Fig. 3 周　辺　図

Ⅲ 調査の経過

1 調査方針

昭和57年度から始まった元総社明神遺跡の発掘調査は、今年度で第11年次を迎えた。調査対象地が道路部分であるため狭長な調査区が多い。昭和57・58年度に実施したトレンチの呼称に追従して、その後も共通な呼称法が採られ、東西方向にのびる調査区を1・2・3トレンチ…、南北方向にのびる調査区をA・B・Cトレンチ…と呼んでいる。が、既に平成元年度の調査においてZトレンチを用いたため、今年度は、南北方向の調査区を『α(アルファ)トレンチ』とし、その立地等の理由から南側よりA区、B区、C区と呼ぶこととした。なお、『トレンチ』とは「調査区」の慣用的な呼び方である。グリッドはすべて公共座標に基づき、座標北を基準に4m単位で設定し、西から東へA・B・C…、北から南へ1・2・3…と番付し、グリッドの呼称は北西杭の名称とした。平面座標・水準の移動は、区画整理に伴う近接した基準点を利用し、委託測量により行った。今年度のA－1グリッドの公共座標は、第Ⅸ系x＝＋43,340m、y＝－71,040mである。

グリット設定後、プラン確認を行い調査工程を検討し調査を進めた。発掘調査にあたっては、遺構は基本的に「使用面」と「掘り方面」に分けた工程で実施した。図面作成は平板・簡易遣り方測量を用い、原則的に1/20の縮尺で、必要に応じて1/10の縮尺で作成した。遺構の遺物については平面分布図を作成し、台帳に各種記録を採りながら収納した。包含層の遺物は、グリッド単位で層位毎に収納した。ただし、白磁・青磁など重要と判断した遺物は、分布図・遺物台帳の記載を行い収納した。

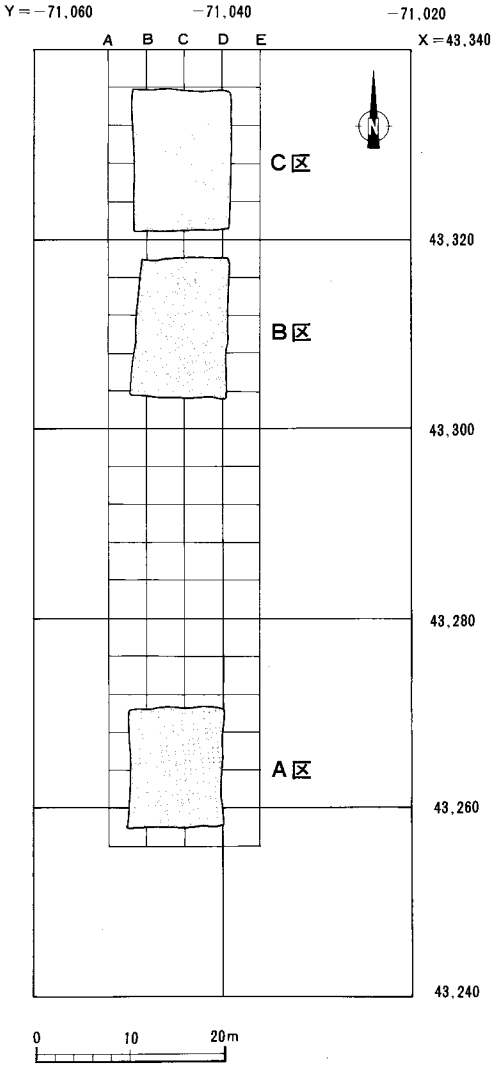


Fig. 4 グリット設定図

2 調 査 経 過

今年度は、4月28日に発掘調査委託契約を締結後、現場事務所の設置や発掘器材の搬入・点検など準備を進め、連休明けの5月6日、重機によるA区の表土掘削から着手した。この区域は昭和63年度の調査区（24トレンチ）の南側に隣接している。その調査により、総社砂層の上位に黄褐色土（古墳時代確認面）が堆積していること、古墳時代の住居址の存在すること等が予想された。表土掘削を開始すると、地表下わずか20㎝足らずで黄褐色土層が現れたため、その上面で掘削を中止し、プラン確認に移った。また、B区の表土掘削を5月8日より開始し、A・B区の調査を平行して実施した。今年度の調査区は、交通量の多い幹線道路沿いに位置するため、夜間照明を備えたバリケードで周りを囲い、安全対策に万全の注意を払いながらの調査となった。5月中、A区では4軒の住居址を中心に、B区では調査区を東西に横断する2条の溝址の掘り下げを中心にした調査を実施した。この付近一帯は5～6年前までは桑園を中心とした畑地が広がっていたが、現在では店舗や住宅が軒を連ね、看板等による攪乱をかなり受けていた。5・6月は、好天に恵まれ、予定を上回る早さで工程を消化し、6月10日にA・B区の全景写真撮影を行った。A区で引き続き掘り方の調査等の精査を進める傍ら、B区の埋め戻しを行い地盤の固まるのを確認後、6月17日にC区の表土掘削を始めた。本来ならB・C区一括して調査を実施するところだが、飲食店の駐車場となっているため営業に重大な影響を及ぼすことが懸念されたために講じた措置である。C区の表土掘削を終えてみると、4～5m四方の攪乱が調査区の中央及び北東部で総社砂層を掘り込む深さまで達しており、遺構面をかなり痛めつけていた。当初のプラン確認では、井戸址1基と一連の土坑群のみであったが、さらに精査を進めると、攪乱に切り込まれた住居址2軒、井戸1基を新たに確認することができた。これらの中で特に時間を費やしたのは、2基の井戸址であった。狭小での掘り下げ・図面作成等に苦労しながらの調査であった。7月3日、C区と同時に調査を進めて来たA区の埋め戻しを行った。9日にはようやくC区の遺構全体写真撮影を実施することができた。その後、精査・全体図作成等を行い、7月22日にC区埋め戻しを終え現地でのすべての調査を完了した。

今年度の現地での発掘調査は、5月6日から7月22日までの約3ケ月、遺物整理・報告書作成の作業は、12月1日から3月20日まで実施した。

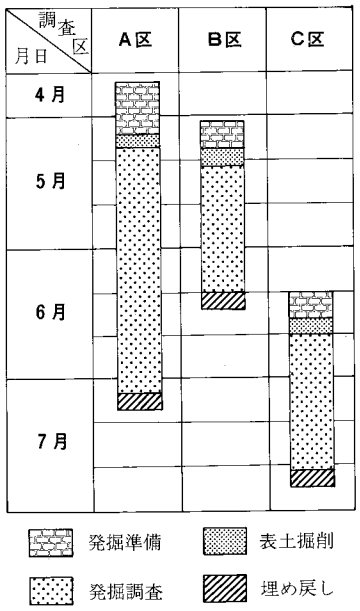


Fig. 5 調 査 経 過 図

Ⅳ　層　　序

元総社明神遺跡は、利根川が赤城山と榛名山の間から関東平野に流れ出した所に広がる緩傾斜の台地である前橋台地に立地している。この前橋台地は、浅間山の山体崩壊に因る前橋泥流層・前橋泥流層が浸食された凹地に堆積した前橋泥炭層とそれらを覆う葉理の発達した淘汰のよい総社砂層から成り立っている。本遺跡地は、この前橋台地に相馬ケ原扇状地の末端が及ぶ場所に位置している。そのことは、今年度の標準土層図が示すように前橋泥炭層の下に相馬ケ原扇状地堆積物が認められることからも窺える。

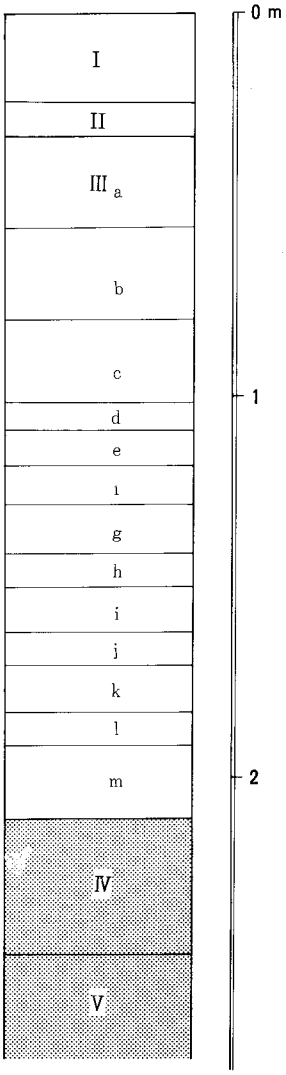


Fig. 6　標 準 土 層 図

Ⅰ　層：耕作土

暗褐色細砂層

Ⅱ　層：黄褐色細砂層

Ⅲ　層：総社砂層（縄文時代に形成）

a…明黄褐色細砂層

b…鈍い黄橙色粗砂層

c…鈍い黄褐色微砂層

d…黄褐色細砂層

e…鈍い黄褐色シルト層

f…灰黄色シルト層

g…暗褐色微砂層

h…暗灰黄色細砂層

i…黄褐色微砂層

j…オリーブ褐色シルト層

k…鈍い黄褐色粘土層

l…黄褐色シルト層

m…鈍い黄褐色粘土層

Ⅳ　層：前橋泥炭層上部

黒褐色泥炭層

As－Sj（約11,000年前）を含む

Ⅴ　層：相馬ケ原扇状地堆積物

オリーブ褐色砂礫層

As－YP（約13,000～14,000年前）を含む

V　調査区の遺構と遺物

1　A　　区

本調査区は、昭和63年度に調査された24トレンチの南隣に位置している。調査前の様子は、資材置き場及び駐車場となっており、機械油の広がっている箇所も見られた。また、北東隅には近くの店舗の看板が建ち、その基礎のコンクリート部分が地中に深く埋め込まれていた。現在の地表面から遺構確認面まで非常に浅いため、現代の耕作等の影響を受けており、削平が著しい状況下での調査となった。そのような中で、住居址４軒、溝址１条、土坑12基を検出した。遺物総数は、遺構・グリッド単位で取り上げたものを含め、1,155点であった。

（1）住　居　址

H－１号住居址（挿　図　Fig. 9　　写　真　PL. 2・3）

位　置　A－18、A－19、B－18、B－19グリッド

面　積　（16.63㎡）　　**方　位**　N－77°－E　　**標　高**　115.7m

形　状　一部調査区外のため確認できた範囲では、東西4.65m、南北（3.90m）であり、ほぼ直交することから、方形の住居址と思われる。壁は73°で立ち上がり、壁高18㎝を測る。南側及び東側の竈より北の部分で幅25㎝、深さ最大約７㎝の周溝が検出された。

床　面　全体に平坦で踏み固められている。特に東側の竈周辺部は、堅緻な床面が確認された。

覆　土　削平を受けているため、As－CとHr－FPをわずかに含む２層が確認された。竈付近を中心に広範囲で住居内に粘土の塊が検出された。

竈　東壁の南に偏在する位置に設置されている。残存状態は良好で、両袖を残していた。全長107㎝、全幅90㎝、焚き口部幅25㎝を測る。竈内壁の断面は「U」字形を呈し、火床面は良く焼け、灰も多量に検出された。支柱には、円柱状の砂質凝灰岩が使用されていた。両袖の先端には、埋め込み袖の補強材として石を使用したと思われるような深さ約15㎝程の穴も発見された。

柱　穴　主柱穴と思われるピットは、P_1～P_3である。いずれも径30㎝前後の円形を呈し、50～70㎝の深さで総社砂層を掘り込んでいた。また、P_5・P_6も検出されているが、深さは25㎝前後の比較的浅いものであった。

貯蔵穴　住居南東隅にP_4（長径57㎝・短径45㎝・深さ50㎝の楕円形）が検出された。

掘り方　多少の凹凸はあるが、全面に５㎝前後の厚さで掘り方が埋められ、床を構築している。

重　複　H－３号住居址・D－11号土坑と重複している。H－３号住居址の竈が本住居址内より検出されたことから、本住居の方が先行する。D－11号土坑とも重複しているが、その前後関係は把握できなかった。

遺　物　出土遺物総数は224点で、土師器等の小破片が多く、接合できるものは少なかった。その多くは、古墳時代のものである。図示したものは、土師坏（1）鉄釘（2）削器（1）敲石（2）である。なお、削器は、外からの流れ込みと思われる。

備　考　調査区外になるため、南側のみ検出したが、北側の調査区外の部分は、昭和63年度調査の24トレンチのH－24号住居址にあたるものと考えられる。そのことから、本住居の規模を測ると、東西4.65m、南北5.35mの長方形を呈する。H－24号住居址の詳細については、報告書『元総社明神遺跡Ⅶ』を参照して戴きたい。

H－2号住居址（挿　図　Fig. 10　　写　真　PL. 3）

位　置　B－18、C－18、C－19、D－18グリッド

面　積　（17.00㎡）　　**方　位**　N－155°－E　　**標　高**　115.7m

形　状　一部調査区外のため確認できた範囲では、東西（4.40m）、南北（5.00m）であり、ほぼ直交することから、方形を呈していたと思われる。壁は、68°で立ち上がり、壁高は11㎝を測る。

床　面　全体に平坦で踏み固められている。特に南側の竈周辺部分は、固く締まっていた。

覆　土　削平を受けているため、As－C・Hr－FPをわずかに含む2層が検出された。

竈　南壁の西側に偏在する位置で、本体は壁面より外側に設けられている。全長75㎝、焚き口部幅70㎝を測る。煙道は、約20°の角度でなだらかに立ち上がる。

柱　穴　P_1～P_3が検出された。P_1は径約40㎝・深さ63㎝、P_2は径約25㎝・深さ87㎝、P_3は径約30㎝・深さ25㎝で、いずれも円柱形を呈している。

掘り方　深さ10～20㎝で凹凸が多く、基本的には貼り床は認められなかった。

重　複　W－3号溝址と重複しているが、本住居が先行する。

遺　物　出土総数131点。小破片が多く、接合できるものはわずかであった。

H－3号住居址（挿　図　Fig. 11　　写　真　PL. 3）

位　置　A－18、B－18グリッド

面　積　（4.81㎡）　　**方　位**　N－112°－E　　**標　高**　115.7m

形　状　H－1号住居址内に位置し、竈付近を中心とした調査であった。調査区内で確認できた範囲では、東西（2.35m）、南北（2.50m）を測り、ほぼ直交することから、方形を呈していたと思われる。

床　面　H－1号住居址と同レベルにある。平坦で固く締まっている。

覆　土　H－1号住居址と同じである。

竈　東壁の南側に偏在する位置で、本体は壁面より外側に設けられている。全長82㎝、焚き口部幅48㎝を測る。両袖の先端には、埋め込み袖の補強材として、径約10㎝の砂質凝灰

岩が使用されていた。

掘り方　確認できなかった

重　複　H－1号住居址と重複しており、本住居が新しい。

遺　物　竈付近で数点の検出。H－1号住居址と重複関係にあるため、H－1号住居址で検出された遺物の中にも本遺構に属する遺物もあると思われる。

備　考　H－1号住居址の調査中で竈が確認された住居址であるため、全様は把握できなかった。

H－4号住居址（挿　図　Fig. 11　　写　真　PL. 3・4）

位　置　B－20、B－21、C－19、C－20、C－21グリッド

面　積　（22.24㎡）　　**方　位**　不明　　**標　高**　115.6m

形　状　調査区内で確認できた範囲では、東西（5.35m）、南北（4.25m）を測り、ほぼ直交することから、方形を呈していたと思われる。

床　面　確認面が本住居の床面より下であったため、検出されなかった。幅20cm、深さ10cm前後の周溝が北側及び西側の一部で認められた。西側は、さらに南に向かって延びていた可能性が高いが、後世の耕作等により削られていた。

竈　確認できなかった。

掘り方　確認できなかった。

重　複　D－4～9号土坑、W－3号溝址と重複している。D－8号土坑、W－3号溝址より本住居が先行する。他の土坑との前後関係は、把握できなかった。

遺　物　出土総数76点。図示したものは、円形の硯と思われる須恵器の円盤状のもの（3）土師小甕（4）である。

（2）溝　　址

W－3号溝址（挿　図　Fig. 11　　写　真　PL. 3・4）

位　置　C－18、C－19、C－20、C－21、D－18、D－19、D－21グリッド

形状等　A区の東端に位置し、比高約40cmをもって北から南に延びる。本体部分は東側の道路の下に位置しているので確認できなかった。確認できた範囲では、南側で上幅最大約0.9m、深さ0.5mを測る。土層の堆積状況から近世以降のものと考えられる。

重　複　H－2・H－4号住居址と重複しているが、本遺構が新しい。

遺　物　出土総数34点。

（3）土　　坑

D－1号土坑（挿　図　Fig. 12　　写　真　PL. 4）

位　置　B－21グリッド

形状等　長径55cm、短径45cmの円形を呈し、深さ27cmを測る。床面は、ほぼ平坦。

遺　物　土師質高台椀（５）が出土した。

Ｄ－２号土坑（挿　図　Fig. 12　　写　真　ＰＬ．４）

位　置　Ｂ－21グリッド

形状等　長径102cm、短径59cmの楕円形で、深さ25cmを測る。断面形は台形で、底面は平坦。

Ｄ－３号土坑（挿　図　Fig. 12）

位　置　Ｃ－20、Ｃ－21グリッド

形状等　不整形。長径114cm、短径85cm、深さ32cmを測る。

Ｄ－４号土坑（挿　図　Fig. 12）

位　置　Ｃ－20、Ｃ－21グリッド

形状等　長径28cm、短径24cmの円形で、深さ12cmを測る。断面形は摺鉢状。Ｈ－４号住居址と重複する。

Ｄ－５号土坑（挿　図　Fig. 12）

位　置　Ｃ－20グリッド

形状等　長径46cm、短径35cmの楕円形で、深さ10cmを測る。Ｈ－４号住居址と重複する。

Ｄ－６号土坑（挿　図　Fig. 12）

位　置　Ｃ－21グリッド

形状等　長径173cm、短径73cmの楕円形で、深さ31cmを測る。断面形は摺鉢状。Ｈ－４号住居址と重複する。

遺　物　出土遺物は、総数30点。小破片が多く、接合できるものは少なかった。

Ｄ－７号土坑（挿　図　Fig. 12）

位　置　Ｃ－20グリッド

形状等　長径125cm、短径105cmの隅丸方形で、深さ29cmを測る。Ｈ－４号住居址と重複する。

遺　物　出土遺物総数は42点であったが、小破片が多く、接合できるものは少なかった。

Ｄ－８号土坑（挿　図　Fig. 12　　写　真　ＰＬ．４）

位　置　Ｃ－20グリッド

形状等　長径50cm、短径42cmの円形で、深さ35cmを測る。Ｈ－４号住居址と重複する。

D－9号土坑（挿　図　Fig. 12）

位　置　C－20グリッド

形状等　長径32cm、短径29cmの円形で、深さ13cmを測る。H－4号住居址と重複する。

D－11号土坑（挿　図　Fig. 12）

位　置　A－19グリッド

形状等　長径48cm、短径44cmの円形で、深さ64cmを測る。H－1号住居址と重複する。

D－12号土坑（挿　図　Fig. 12　　写　真　PL. 4）

位　置　A－19、B－19、B－20グリッド

形状等　楕円形。長径87cm、短径66cm、深さ28cmを測る。壁は垂直の立ち上がり、底面は平坦。

遺　物　出土遺物は31点を数えるが、小破片が多く接合できるものは少なかった。

D－13号土坑（挿　図　Fig. 12）

位　置　B－19グリッド

形状等　長径92cm、短径85cmの円形で、深さ21cmを測る。底面は平坦。

2　B　　区

本調査区は、C区とともに飲食店の駐車場として使用されている。本来なら両区を一括して調査にあたるところであるが、両区の間にある巨大な看板の撤去等の問題や店の営業に及ぼす影響等の理由から、調査依頼者（区画整理第一課）・地権者と協議し、分割調査となった。その結果、平行して東西にのびる溝址が調査区の中央付近に2条、その溝址の間に土坑が1基検出された。また、遺物総数は690点であった。

（1）溝　　址

W－1号溝址（挿　図　Fig. 13　　写　真　PL. 5）

位　置　A－7、B－7、C－7、D－7グリッド

形状等　本調査区の中央部やや北に位置し、東から西に調査区を横断する形で、比高25cmを持って延びる。中央部付近は攪乱により切られていたが、上幅約2.5m、下幅約0.2～0.5m、深さ約1mを測り、総社砂層を切り込んで作られている。断面は緩やかなV字形を呈する。西端は溝が途切れているが、この部分は〝渡り〟になると思われる。この〝渡り〟の立ち上がり部分には、ほぼ一列に並ぶ柱穴が4個検出された。その規模は、P_1（長径25cm、短径20cm、深さ29cm）、P_2（長径25cm、短径20cm、深さ30cm）、P_3（長径24cm、

短径18cm、深さ38cm）、P_4（長径27cm、短径25cm、深さ43cm）とほぼ同規模であり、柵または橋のような施設の柱穴にあたるものと考えられる。

遺　物　出土遺物総数42点。土師器、常滑焼、布目瓦等様々である。図示したものは、摺鉢（7）常滑焼壺（8）磨石（3，4）である。

W－2号溝址（挿　図　Fig. 14　　写　真　PL. 5・6）

位　置　A－8、A－9、B－8、B－9、C－8、C－9、D－8、D－9グリッド

形状等　本調査区の中央部やや南に位置し、W－1号溝址とほぼ平行する形で、東から西に比高22cmで延びている。上幅が約3m、下幅が約0.2～0.6m、深さが約2mを測り、W－1号溝址より規模のやや大きなものである。断面は、V字形で薬研堀の形を呈している。C－8グリッドの溝底から1m付近までの間に、石（径30～70cm程）が数多く検出された。その付近より土師質皿（カワラケ）も3個体出土している。

遺　物　出土総数186点。土師器や須恵器の破片の他に、布目瓦、板碑、石臼、敲石等も数多く出土している。図示したものは、土師質皿（9～11）土製円盤（12）瓦器摺鉢（13）フイゴ羽口（14）常滑焼（15）板碑（5）敲石（6～10，16）磨石（11）凹石（12）石摺鉢（13）石臼を加工した石製品（14）砥石（15）である。

（2）土　　坑

D－10号土坑（挿　図　Fig. 13　　写　真　PL. 6）

位　置　B－8、B－9グリッド

形状等　楕円形。長径62cm、短径40cm、深さ36cmを測る。底面は平坦で壁はほぼ垂直。

3　C　　区

本調査区はB区と看板を間にして隣接し、飲食店の駐車場の一部であるため昼時は車の出入りが頻繁であり、東側に交通量の多い幹線道路があるため、事故防止に配慮しながらの調査となった。表土排除を終えてみると、調査区の中央部及び北東側を大きな攪乱が占めていた。また、客土層の下の確認面から遺構の床面まで差が小さく、遺構の検出に苦労した。そのような状況下で、住居址2軒、井戸址2基、土坑39基が検出された。遺物総数は、706点であった。

（1）住　居　址

H－5号住居址（挿　図　Fig. 15　　写　真　PL. 7）

位　置　A－4グリッド

面　積　0.67㎡　　**方　位**　不明　　**標　高**　115.9m

形　状　調査区内で確認できた範囲では、東西（1.08m）、南北（2.30m）、壁高12cmを測る。南北両壁がほぼ平行となることから、方形を呈していたと思われる。西側は調査区外、東側は攪乱により破壊されていたため、検出できた範囲は、わずかであった。

床　面　ほぼ平坦で、固く締まっている。ピット等は検出されなかった。

竈　調査した範囲では確認できなかった。

掘り方　認められなかった。

H－6号住居址（挿　図　Fig. 15　　写　真　PL. 7）

位　置　C－2、C－3、D－2、D－3グリッド

面　積　4.12㎡　　**方　位**　N－172°－W　　**標　高**　115.9m

形　状　調査区内で確認できた範囲では、東西（1.86m）、南北（3.25m）、壁高5cmを測る。南北両壁がほぼ平行し、住居址の北西隅が直交することから、方形を呈していたと思われる。確認面から床面まで差が見られず、一部では床面に達している所もあった。

床　面　一部床面に達している箇所も見られたが、確認された部分ではほぼ平坦。

竈　南壁に位置し、本体は壁面より外側に設けられ、焚き口部幅42cm、全長50cmを測る。

柱　穴　P_1～P_3が検出された。P_1（長径36cm、短径33cm、深さ20cm）P_2（長径34cm、短径28cm、深さ26cm）は円形だが、P_3（長径35cm、短径29cm、深さ33cm）は方形を呈す。

掘り方　確認されなかった。

遺　物　土師器等数点が検出されたが、小破片ばかりで接合できなかった。

（2）井　戸　址

I－1号井戸址（挿　図　Fig. 15　　写　真　PL. 6）

位　置　B－2、C－2グリッド

形状等　確認面での規模は上幅で長径1.1m、短径0.9m、深さ5.1mで、平面形では、ほぼ円形を呈している。固い総社砂層をほぼ垂直に掘り込んで作られている。確認面より2.5m程掘り下げると、灰や骨（腐食しており人骨かどうか判明不可能）とともに、多量の石（石臼・河原石等）が検出された。

遺　物　出土遺物総数195点。図示したものは、土師質坏（17～20）瓦器（21）灰釉高台椀（22）古銭（23）石皿（18, 20）石臼（21～28）石摺鉢（19）である。

I－2号井戸址（挿　図　Fig. 15　　写　真　PL. 6）

位　置　B－3、B－4、C－3、C－4グリッド

形状等　上幅で径約0.8mの円形を呈し、深さ3.8mを測る。下幅は長径1.1m、短径1mを測り、下がるにつれてやや広がりを見せる。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、底面より約1m付

近に南側に迫り出すテラス状部分を持つ。

遺　物　出土遺物は、63点を数える。

（3）土　　坑

D－14号土坑（挿　図　Fig. 16）

位　置　B－2、B－3グリッド

形状等　長径52cm、短径40cmで楕円形を呈し、深さ39cmを測る。底面は、ほぼ平坦。

D－15号土坑（挿　図　Fig. 16）

位　置　B－2グリッド

形状等　長径50cm、短径38cmで楕円形を呈し、深さ19cmを測る。底面は、平坦。

D－16号土坑（挿　図　Fig. 16　　写　真　PL. 7）

位　置　D－3グリッド

形状等　長軸44cm、短軸22cmの方形を呈し、深さ17cmを測る。中段に平坦な部分を持つ。D－17号土坑と重複している。

D－17号土坑（挿　図　Fig. 16　　写　真　PL. 7）

位　置　D－3グリッド

形状等　楕円形。長径48cm、短径30cm、深さ34cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。D－16号土坑と重複している。

D－18号土坑（挿　図　Fig. 16）

位　置　C－4グリッド

形状等　長径40cm、短径30cmの楕円形を呈する。深さ21cmを測る。

D－19号土坑（挿　図　Fig. 16）

位　置　C－4グリッド

形状等　長径28cm、短径24cmで、円形を呈する。深さ36cmを測る。

D－20号土坑（挿　図　Fig. 16）

位　置　C－2グリッド

形状等　長径38cm、短径30cmの方形を呈する。深さは、39cm。底面は、ほぼ平坦。

D－21号土坑（挿　図　Fig. 16）

位　置　C－2、D－2グリッド

形状等　楕円形。長径37cm、短径28cm、深さ46cmを測る。

D－22号土坑（挿　図　Fig. 16）

位　置　C－5グリッド

形状等　長径55cm、短径44cmの楕円形を呈し、深さ23cmを測る。

D－23号土坑（挿　図　Fig. 16）

位　置　D－5グリッド

形状等　一部調査区外であるが、確認できた範囲では長径32cm、短径（30cm）で円形を呈すると思われる。深さは、21cmを測る。

D－24号土坑（挿　図　Fig. 16）

位　置　C－3グリッド

形状等　長径26cm、短径19cmの楕円形を呈し、深さ38cmを測る。

D－25号土坑（挿　図　Fig. 16）

位　置　B－2グリッド

形状等　長径43cm、短径37cmの円形を呈し、深さ23cmを測る。

D－26号土坑（挿　図　Fig. 16　　写　真　PL. 7）

位　置　B－2グリッド

形状等　長径50cm、短径48cmの円形を呈し、深さ38cmを測る。底面は、ほぼ平坦。D－27号土坑と重複している。

D－27号土坑（挿　図　Fig. 16　　写　真　PL. 7）

位　置　B－2グリッド

形状等　長軸57cm、短軸42cmの不整形を呈し、深さは22cmを測る。底面は、ほぼ平坦。D－26号土坑と重複している。

D－28号土坑（挿　図　Fig. 16）

位　置　B－3グリッド

形状等　長径64cm、短径58cmの円形を呈し、深さは14cmを測る。底面はほぼ平坦。D－29号土坑

と重複関係にあるが、本遺構が先行する。

D－29号土坑（挿　図　Fig. 16）

位　置　B－3グリッド

形状等　長軸27cm、短軸21cmの方形を呈し、深さ28cmを測る。底面は平坦。D－28号土坑と重複関係にあるが、本遺構が新しい。

D－30号土坑（挿　図　Fig. 16）

位　置　D－3グリッド

形状等　楕円形。長径42cm、短径30cm、深さ32cmを測る。

D－31号土坑（挿　図　Fig. 16）

位　置　A－2グリッド

形状等　不整形。長軸70cm、短軸34cm、深さ24cmを測る。底面は平坦。

D－32号土坑（挿　図　Fig. 16）

位　置　D－5グリッド

形状等　長軸28cm、短軸23cmの方形を呈し、深さ18cmを測る。

D－33号土坑（挿　図　Fig. 16）

位　置　C－4グリッド

形状等　径25cmの円形を呈し、深さ24cmを測る。

D－34号土坑（挿　図　Fig. 17　　写　真　PL. 7）

位　置　D－4グリッド

形状等　長径42cm、短径37cmの円形を呈し、深さ23cmを測る。

D－35号土坑（挿　図　Fig. 17）

位　置　D－4グリッド

形状等　長軸50cm、短軸28cmの不整形を呈し、深さは31cmを測る。

D－36号土坑（挿　図　Fig. 17）

位　置　D－4グリッド

形状等　隅丸長方形。長軸50cm、短軸31cm、深さ24cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

D－37号土坑（挿　図　Fig. 17）

位　置　C－4グリッド

形状等　長径40cm、短径35cmの円形を呈し、深さ16cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

D－38号土坑（挿　図　Fig. 17）

位　置　C－4グリッド

形状等　長軸40cm、短軸35cmの隅丸方形を呈し、深さ40cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

D－39号土坑（挿　図　Fig. 17）

位　置　C－3、C－4グリッド

形状等　隅丸方形。長軸34cm、短軸30cm、深さ24cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

D－40号土坑（挿　図　Fig. 17）

位　置　C－3グリッド

形状等　隅丸方形。長軸40cm、短軸22cm、深さ19cmを測る。底面は平坦。

D－41号土坑（挿　図　Fig. 17）

位　置　C－3グリッド

形状等　長径34cm、短径32cmの円形を呈し、深さ38cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

D－42号土坑（挿　図　Fig. 17）

位　置　D－4グリッド

形状等　長径43cm、短径32cmの楕円形を呈し、深さ30cmを測る。底面はほぼ平坦。

D－43号土坑（挿　図　Fig. 17）

位　置　A－3、B－3グリッド

形状等　長径46cm、短径38cmの楕円形を呈し、深さ66cmを測る。

D－44号土坑（挿　図　Fig. 17）

位　置　B－3、B－4グリッド

形状等　長径55cm、短径52cmの円形を呈し、深さ38cmを測る。底面は、ほぼ平坦。

D－45号土坑（挿　図　Fig. 17）

位　置　A－5グリッド

形状等　長軸44cm、短軸20cmの不整形を呈し、深さは58cmを測る。南側は中段部をもち、底面はほぼ平坦。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

D－46号土坑（挿　図　Fig. 17）

位　置　A－2、B－2グリッド

形状等　長径73cm、短径32cmの楕円形を呈し、深さ42cmを測る。

D－47号土坑（挿　図　Fig. 17）

位　置　A－2グリッド

形状等　楕円形。長径53cm、短径30cm、深さ44cmを測る。底面はほぼ平坦。壁はほぼ垂直に立ち上がる。D－50号土坑と重複関係にあるが、本遺構が新しい。

D－48号土坑（挿　図　Fig. 17）

位　置　A－4グリッド

形状等　長径36cm、短径28cmの円形を呈し、深さ43cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

D－49号土坑（挿　図　Fig. 17）

位　置　A－3グリッド

形状等　長径31cm、短径26cmの円形を呈し、深さ35cmを測る。

D－50号土坑（挿　図　Fig. 17）

位　置　A－2グリッド

形状等　不整形。長軸96cm、短軸68cm、深さは13cmを測る。底面はほぼ平坦。D－47号土坑と重複関係にあるが、本遺構が先行する。

D－51号土坑（挿　図　Fig. 17　　写　真　PL. 7）

位　置　A－3グリッド

形状等　長径58cm、短径47cmの楕円形を呈し、深さ32cmを測る。底面はほぼ平坦。

遺　物　総数18点。図示したものは、土師質高台椀（24）土師質坏（25）である。

D－52号土坑（挿　図　Fig. 17）

位　置　C－2グリッド

形状等　長軸42cm、短軸30cmの不整形を呈し、深さは43cmを測る。

Ⅵ　成果と問題点

元総社明神遺跡の発掘調査も今年度で第11年次を迎えた。例年の数トレンチにおよぶ調査と比べて、本年度はほぼ一カ所にまとまっているため、遺跡の様相も把握しやすいと考えられた。しかし、年を追う毎に都市化が進み、調査開始当時の畑や雑木林の景色も見られなくなり、オフィスや店舗の建物が一帯に広がっているため、今年度の区域も削平が著しく遺構面に達している箇所も多く、その様相をとらえるのに難渋した。そのような状況下で、本年度の調査では、住居址６軒、溝址３条、井戸址２基、土坑52基が検出された。そこで、その成果と問題点を述べてみたい。

住　居　址

今年度の調査では、Ａ区で４軒、Ｃ区で２軒、計６軒の住居址が検出された。Ｈ－１号住居址は、昭和63年度調査の24トレンチの24号住居址の南側にあたると思われる。今回の出土遺物は土師器の破片が多く、復元されたものは少ないが、竈付近に集中して出土した遺物および図示した坏（１）等からその時期を検討してみると、６世紀後半～７世紀初頭、鬼高Ⅲ式に位置づけられよう。Ｈ－２号住居址の出土した多くの土師器片は、６世紀中葉、鬼高Ⅰ～Ⅱ式に比定されよう。Ｈ－３号住居址は竈周辺部の調査に終わったが、重複関係からＨ－１号住居址より新しくなることが判明した。しかし、出土遺物が少なかったため、時期は不明である。Ｈ－４号住居址は、掘り方面の調査であったため、形状は周溝により判断した。確認できた範囲で長辺が５ｍを超える大きさであることと図示した小甕（４）や多くの土師器破片より、６世紀後半～７世紀初頭、鬼高Ⅲ式にあたる住居と考えられる。

Ｃ区で検出されたＨ－５号住居址については、確認できた範囲が非常に狭く、出土遺物も少ないため、時期については不明である。また、Ｈ－６号住居址は、南北3.25ｍの方形のプランで南竈をもつ住居址であるが、Ｈ－５号住居址と同様に遺物が少なく明確な時期等は把握できなかった。

以上のように今回検出された住居址は、時期が捉えられたものはすべて古墳時代にあたる。隣接した昭和63年度調査の24トレンチでもそのほとんどが同時代になるため、牛池川の左岸にあたり比較的安定した地盤をもつこの付近一帯では、古墳時代に集落が形成されていたものと思われる。また、牛池川を挟んで対岸にあたる平成元年度調査のＹトレンチで検出された古墳時代の水田址も本地域の住居址群と関わりがあるのではなかろうか。今年度の調査により、古墳時代における本地域の集落と水田の関係について参考となる貴重な資料を加えることができた。

溝　　址

Ｂ区のほぼ中央部で検出されたＷ－１・Ｗ－２号溝址の２条の溝址は、比高約20㎝をもち東から西へ向かって平行にのびている。Ｗ－１号溝址は、上幅約2.5ｍ、下幅約0.2～0.5ｍ、深さ約１ｍを測り、その断面はＶ字形を呈している。Ｗ－２号溝址はＷ－１号溝址よりやや規模が大きく、上幅約３ｍ、下幅約0.2～0.6ｍ、深さ約２ｍを測り、断面の形状はＶ字状でやや薬研彫りに近いものである。過去の元総社明神遺跡およびその周辺遺跡の調査で検出された上野国府域の境界線を示すと考えられる大溝の場合は、はるかにその規模が大きく、断面もほぼ逆台形を呈している。また、覆土中にAs－Ｂの純層が検出されているが、今回検出されたＷ－１・Ｗ－２号溝址ともAs－Ｂ層が確認されていないことから、国府域の境界線を示す大溝ではないと思われる。さらに出土遺物に目を向けると、土師質土器や瓦器・常滑焼等が多く、その時期は14～15世紀になるものが多い。特にＷ－２号溝址では、その底面付近より土師質皿（カワラケ）が３個体出土しているので、中世の遺構に相当するのではなかろうか。

このようにこの２条の溝址を中世以降のものととらえると、その時期に相当する溝としては蒼海城もしくは八日市場城に関連した遺構が考えられる。『蒼海城絵図』（Ｆig. ７）によると、今年度の調査区は、蒼海城本丸の東側に位置する風呂沼のさらに東、三番橋の北、八日市場城址の北側に位置している。この付近には、『蒼海城絵図』の中で見る限りＷ－１・Ｗ－２号溝址に相当する堀は見当たらない。しかし、出土遺物が中世以降のものであることや溝が東から西へ延びていくことから、蒼海城の外郭防御線の一部になると考えられている風呂沼に通じていたのではなかろうか。以上のことから、今回検出された２条のＷ－１・Ｗ－２号溝址は、『蒼海城絵図』には表されていない蒼海城もしくは八日市場城に関連する新たな堀にあたる可能性が大いにあると思われる。

土　　坑

今年度の発掘調査では、Ａ区で12基、Ｂ区で１基、Ｃ区で39基の総数52基の土坑が検出された。特に集中しているＣ区分布状況をみると、特に東側と北西の２ケ所に多いことが分かる。東側で検出された土坑は、北西のものに比べて規模が小さく、円形もしくは方形の整った形を呈している。出土遺物も北西の土坑に比べて極端に少なく、小破片が数点検出されただけであった。このように、明らかに東側の土坑は他の土坑とその性質が異なっている。Ｃ区に広がる攪乱や著しい削平により当時の様相を言及するには資料が乏しいが、今年度調査のＡ区や昭和63年度調査の24トレンチのようにこの区域にも住居等の建物がひしめいていたものと思われる。本調査区の東側に検出された数多くの土坑は、その住居の柱穴または掘立柱建物の柱穴にあたる可能性もあるのではなかろうか。

元総社明神遺跡の発掘調査も残すところわずかとなった。前橋都市計画事業元総社（西部第三明神）地区土地区画整理事業の道水路部分の幅の狭いトレンチ調査のため、古代の歴史的中心地である推定国府域内に位置し、その後の蒼海城の堀割りも複雑に絡んでくる本地域の全貌を明らかにすることは、非常に困難なことである。しかし、今後新たに実施される調査結果を踏まえ、本遺跡地と周辺遺跡地との関連を含めて研究を重ねていくことにより、この地域の歴史も徐々に解明されていくことであろう。

参考文献

群馬県（1990）『群馬県史　通史編１　原始古代１』群馬県史編さん室

前橋市（1971）『前橋市史　第１巻』前橋市史編さん委員会

群馬県教育委員会 群馬県埋蔵文化財調査事業団（1986）『上野国分僧寺・尼寺中間地域 (1)』

群馬県教育委員会 群馬県埋蔵文化財調査事業団（1987）『上野国分僧寺・尼寺中間地域 (2)』

群馬県教育委員会 群馬県埋蔵文化財調査事業団（1988）『上野国分僧寺・尼寺中間地域 (3)』

群馬県教育委員会 群馬県埋蔵文化財調査事業団（1990）『国分境遺跡』

群馬県教育委員会 群馬町教育委員会　日本道路公団（1986）『北原遺跡』

群馬県教育委員会（1988）『群馬県の中世城館跡』

群馬県埋蔵文化財調査事業団（1985）『浜町屋敷内遺跡Ｃ地点』

山崎　一（1971）『群馬県古城塁址の研究　上巻』

前橋市教育委員会（1984）『柿木遺跡』

前橋市埋蔵文化財発掘調査団（1985）『南田之口遺跡』

前橋市埋蔵文化財発掘調査団（1986）『閑泉樋南遺跡』

前橋市埋蔵文化財発掘調査団（1986）『寺田遺跡』

前橋市埋蔵文化財発掘調査団（1989）『熊野谷遺跡』

前橋市埋蔵文化財発掘調査団（1990）『横俵遺跡群Ⅰ』

前橋市埋蔵文化財発掘調査団（1991）『横俵遺跡群Ⅲ』

前橋市埋蔵文化財発掘調査団（1992）『芳賀北原遺跡』

前橋市埋蔵文化財発掘調査団（1982～1992）『元総社明神遺跡Ⅰ～Ⅹ』

蒼海城
至山王
牛池沢
土橋
昌楽寺跡
0 100m
1954：5
山崎
四番橋
蒼海内（小見内）
五番橋
染谷川
W－1号溝址
W－2号溝址
本丸
二の丸
三番橋
首荒池
四番橋
八日市場城址
昌楽寺
一番橋
三番橋
稲荷台
最教寺
馬場
文
二番橋
平
一番橋
至石倉
天神
高圧線

Fig. 7　蒼海城絵図

付編　元総社明神遺跡XIの野外地質調査

古環境研究所

1．は　じ　め　に

榛名火山南東麓の相馬ケ原扇状地の扇端部に位置する元総社明神遺跡XIでは、扇状地を構成する地層の良好な断面が作成された。ここでは野外地質調査とテフラ検出分析の結果明らかになった地質層序について記載を行う。

2．地　質　層　序

元総社明神遺跡XIの地質柱状図を、図1に示す。地層は下位より成層した砂礫層（層厚46cm以上）、黒褐色泥炭層（層厚15cm）、成層した砂層（層厚188cm）、黄褐色土（層厚9cm）、暗褐色土（層厚23cm）の連続から構成される。最下位の砂礫層のうち上部の砂層中には、繊維束状によく発泡した白色軽石が認められる。軽石の最大径は9mmで、斑晶には斜方輝石が認められる。この軽石は、その特徴から約1.3～1.4万年前に浅間火山から噴出した浅間－板鼻黄色軽石（As－YP：新井，1962，町田ほか，1984）に由来すると考えられる。

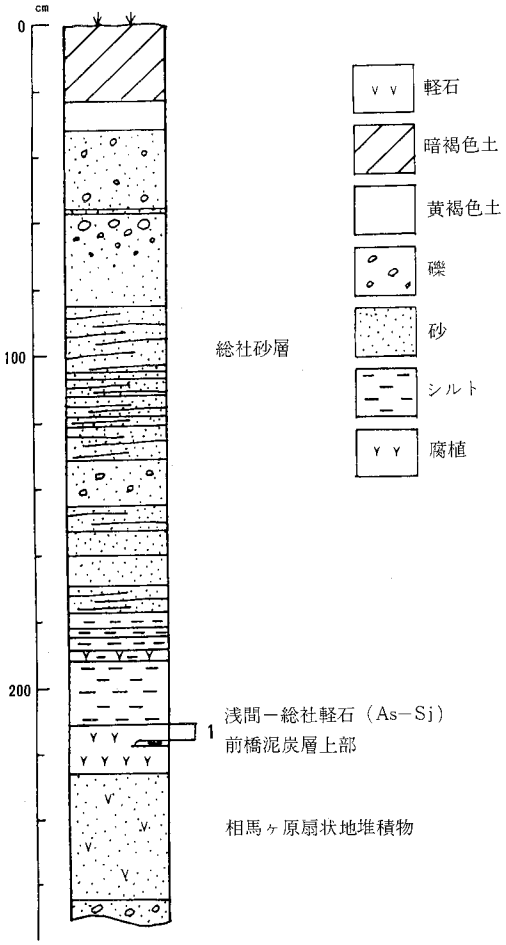


図1　元総社明神遺跡XIの地質柱状図
数字はテフラ検出分析の試料番号

3．テフラ検出分析

（1）分析の目的と方法

比較的安定した堆積状況を示す黒褐色泥炭層の上部についてテフラ検出分析を行い、すでに噴出年代が明らかにされている示標テフラの検出を試みた。分析は次の手順で行われた。

1）試料10gを秤量。

2）超音波洗浄装置により泥分を除去。

3）80℃で恒温乾燥。

4）実体顕微鏡下でテフラ粒子の特徴を観察。

図1　地　質　柱　状　図

（2）分析結果

テフラ検出分析の結果を、表1に示す。試料中には、最大径1.1mmの細粒の灰色軽石が比較的多く含まれている。軽石の発泡はあまり良くない。さらに赤色岩片も含まれている。以上の特徴からこれらのテフラ粒子は浅間火山起源の浅間－総社軽石（As－Sj：早田, 1990）に由来しているものと考えられる。As－Sjについては、すでにその下位の泥炭層から11,170±190y. B. P.（Gak－14760）の14C年代が得られている（前橋市埋蔵文化財発掘調査団, 1990）。このことから、その噴出年代は約1.1万年前と推定される。

表1　元総社明神遺跡XIにおける
テフラ検出分析結果

試料番号	軽石の量	軽石の色調	軽石の最大径（mm）
1	++	灰	1.1

++++：特に多い，　+++：多い，　++：中程度，
+：少ない，　－：認められない，

4．考　　察

As－YPが上部に含まれる最下位の砂礫層は、榛名火山南東麓に広がる相馬ケ原扇状地の概形を構成する相馬ケ原扇状地堆積物（早田, 1990）にほぼ対比される。またAs－YPの上位にありAs－Sjを上部に含む黒褐色泥炭層は、前橋泥炭層上部（早田, 1990）に対比されよう。この総社砂層は、完新世に相馬ケ原扇状地の前面に形成された扇状地性の堆積物と考えられる。

5．ま　と　め

元総社明神遺跡XIにおいて野外地質調査を行った結果、下位より成層した砂礫層、黒褐色泥炭層、成層した砂層の連続が認められた。これらの堆積物は、順に相馬ケ原扇状地堆積物、前橋泥炭層上部、総社砂層にほぼ対比される。総社砂層の上位には、土壌が形成されている。

文　献

新井　房夫（1962）　関東盆地北西部地域の第四紀編年．群馬大学紀要自然科学編，10，P．1－79.

町田　　洋・新井　房夫・小田　静夫・遠藤　邦彦・杉原　重夫（1984）
テフラと日本考古学－考古学研究と関係するテフラのカタログ－．古文化財編集委員会編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」．P．865－928.

前橋市埋蔵文化財発掘調査団（1990）　元総社明神遺跡VIII．P．116.

早田　　勉（1990）　群馬県の自然と風土．群馬県史通史編，1，P．35－129.

早田　　勉（1990）　浅間火山の生い立ち．佐久考古通信，no. 53，P．2－7.

辻　誠一郎・吉川　昌伸・吉川　純子・能城　修一（1985）
前橋台地における更新世末期から完新世初期の植物化石群集と植生．第四紀研究，23，P．263－269.

Tab. 1 遺物観察表

番号	出土位置	器形	大きさ 口径	器高	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	成・整形方法 口縁・胴部	底部	備考	挿図 Fig
1	A区H－1	土師坏	(11.2)	[3.3]	①細粒 ②良好 ③橙 ④1/5	横撫で。外稜あり。	篦削り。		18
2	A区H－1	鉄釘	≪長さ [6.7] 直径 0.7 重さ [6.8]≫						18
3	A区H－4	須恵円盤	≪長さ 7.5 幅 7.5 厚さ 0.6 重さ 12.0≫ ①細粒 ②良好 ③オリーブ灰 ④完形					硯か？	18
4	A区H－4	土師小甕	(10.2)	[6.0]	①細粒 ②良好 ③橙④1/8	口縁部外反。横撫。	篦削り。	整形がやや雑	18
5	A区D－1	高台椀	14.4	5.7	①細粒 ②良好 ③浅黄橙 ④ほぼ完形	やや内湾。轆轤。	高台後付け。		18
6	A区 表採	土師坏	(13.4)	[3.2]	①細粒 ②極好 ③明赤褐 ④1/10	内斜口縁。篦削り。	欠損。	内面、暗紋状磨き。	18
7	B区W－1	擂鉢	(33.8)	10.8	①粗粒 ②不良 ③黄灰 ④1/7	端部折返し。指押。	欠損。	軟質陶器。15c。	18
8	B区W－1	常滑壺	(15.6)	[9.7]	①細粒 ②良好 ③暗オリーブ ④1/10	N字口縁。	欠損。		18
9	B区W－2	土師質皿	8.5	2.4	①細粒 ②不良 ③浅黄橙 ④完形	短く外傾。轆轤。	内面指頭圧痕。	口唇部にスス付着。	18
10	B区W－2	土師質皿	7.2	2.1	①細粒 ②不良 ③灰白 ④4/5	短く外傾。轆轤。	内面指頭圧痕。	右回転糸切り痕。	18
11	B区W－2	土師質皿	(8.0)	1.9	①細粒 ②良好 ③灰黄 ④1/2	直線的外傾。轆轤。	回転糸切り痕。		18
12	B区W－2	土製円盤	≪長さ 5.3 幅 5.1 厚さ 1.6 重さ 36.5≫ ①中粒 ②不良 ③黄橙 ④7/8					高台椀底部を利用。	18
13	B区W－2	擂鉢	(28.4)	13.4	①粗粒 ②不良 ③オリーブ灰 ④1/5	直線的外傾。指押。	欠損。	軟質陶器。15c。	19
14	B区W－2	羽口	≪長さ [5.5] 幅 [5.5] 厚さ [2.5] 重さ [43.6]≫ ①中粒 ②不良 ③灰黄 ④不明					表面は高熱で変質。	19
15	B区W－2	常滑焼壺	－	[8.6]	①中粒 ②極良 ③暗赤褐 ④口縁部のみ				19
16	B区 表採	坏	(8.4)	2.2	①細粒 ②不良 ③淡橙 ④1/2	直線的外傾。轆轤。	右回転糸切り痕。		19
17	C区I－1	坏	11.3	2.9	①細粒 ②良好 ③にぶい橙 ④完形	直線的外傾。轆轤。	右回転糸切り痕。		19
18	C区I－1	坏	(11.0)	3.2	①細粒 ②良好 ③にぶい橙 ④2/3	直線的外傾。轆轤。	右回転糸切り痕。		19
19	C区I－1	坏	(11.2)	2.6	①細粒 ②良好 ③浅黄橙 ④2/3	外傾。轆轤。	回転糸切り後調整。		19
20	C区I－1	坏	12.0	3.4	①細粒 ②不良 ③淡橙 ④3/4	直線的外傾。轆轤。	右回転糸切り痕。		19
21	C区I－1	火鉢	(39.2)	[4.1]	①中粒 ②極良 ③淡橙 ④口縁部のみ			搬入品（観音山）	19
22	C区I－1	灰釉高台椀	－	[2.7]	①細粒 ②極良 ③灰白 ④底部のみ	不明。	回転糸切り痕。	高台後付け。	19
23	C区I－1	古銭	≪①朝鮮通寶 ②銅 ③李氏朝鮮 ④1423年 ⑤対 ⑥行 ⑦2.4 ⑧0.6 ⑨3.4≫						19
24	C区D－51	高台椀	(12.4)	[4.4]	①細粒 ②良好 ③にぶい橙 ④1/4	内湾ぎみ。轆轤。	不明。		19
25	C区D－51	坏	(11.4)	2.9	①細粒 ②良好 ③にぶい橙 ④1/2	やや内湾。轆轤。	右回転糸切り痕。		19
26	C区 表採	緑釉高台椀	－	1.2	①細粒 ②良好 ③緑灰 ④底部のみ	不明。	不明。		19

註）表の記載は以下の基準で行った。

1．胎土は細粒（0.9mm以下）、中粒（1.0～1.9mm）、粗粒（2.0mm以上）とし、特殊な鉱物が入る場合に鉱物名を記載。

2．焼成は極良・良好・不良の3段階評価。

3．色調は土器外面で観察し、色名は新版標準土色帖（小山・竹原，1976）によった。

4．大きさ、重さの単位はそれぞれcm、gであり、現存値を［ ］、復元値を（ ）で示した。

5．古銭は①銭名 ②材質 ③時代 ④初鋳年代 ⑤読み方 ⑥字体 ⑦外輪 ⑧内輪 ⑨重さの順で記載。

Tab. 2　石製品・石器観察表

番号	出土位置	器　種	長さ	幅	厚さ	重さ	色　調	石　材	備　考	Fig
1	A区H－1	削　器	5.5	10.1	1.7	102.0	灰　褐	黒色頁岩		20
2	A区H－1	敲　石	13.3	5.6	3.3	390.0	オリーブ灰	粗粒安山岩		20
3	B区W－1	磨　石	13.5	9.7	4.2	950.9	褐　灰	粗粒安山岩		20
4	B区W－1	磨　石	8.4	8.1	4.3	395.8	灰　褐	粗粒安山岩		20
5	B区W－2	板　碑	[12.8]	[10.1]	[0.7]	[173.3]	緑　灰	緑色片岩	文字有り	20
6	B区W－2	敲　石	[11.8]	[6.9]	[3.2]	[276.8]	黒	頁　岩		20
7	B区W－2	敲　石	9.5	3.1	2.3	93.4	黒	頁　岩		20
8	B区W－2	敲　石	10.3	4.6	4.1	290.5	青　灰	粗粒安山岩		20
9	B区W－2	敲　石	[10.6]	5.1	[2.8]	[235.7]	黒	頁　岩		20
10	B区W－2	敲　石	[15.8]	6.8	4.2	[550.4]	灰　褐	黒色頁岩		20
11	B区W－2	磨　石	[15.8]	[8.8]	4.3	[950.1]	オリーブ灰	粗粒安山岩		21
12	B区W－2	凹　石	[12.6]	[11.7]	10.6	[2,100.0]	黄　灰	粗粒安山岩		21
13	B区W－2	石擂鉢	口径：(29.4)	底径：(6.8)		器高：12.7	灰　褐	粗粒安山岩	残　1/5	21
14	B区W－2	石製品	[9.3]	[19.1]	8.2	[1,350.0]	黄　褐	砂　岩	石臼の一部利用	21
15	B区W－2	砥　石	[9.6]	3.0	2.3	[111.6]	灰　褐	砥沢石		21
16	B区W－2	敲　石	10.5	4.1	2.8	196.4	緑　灰	ひん岩		21
17	C区Ⅰ－1	砥　石	[9.2]	3.6	3.5	[190.6]	灰　白	砥沢石		21
18	C区Ⅰ－1	石　皿	口径：(35.0)	底径：－		器高：[10.5]	灰　褐	粗粒安山岩	残　1/7	21
19	C区Ⅰ－1	石擂鉢	口径：(31.6)	底径：－		器高：[9.9]	オリーブ黒	粗粒安山岩	残　1/4	21
20	C区Ⅰ－1	石　皿	口径：(14.6)	底径：－		器高：[5.5]	灰オリーブ	粗粒安山岩	残　1/10	21
21	C区Ⅰ－1	石　臼	[16.2]	29.4	10.0	[6,200.0]	褐　灰	粗粒安山岩	残　1/2	21
22	C区Ⅰ－1	石　臼	[13.0]	[22.1]	8.0	[2,700.0]	褐　灰	粗粒安山岩	残　1/3	21
23	C区Ⅰ－1	石　臼	[11.7]	[15.1]	9.8	[2,100.0]	褐　灰	粗粒安山岩	残　1/8	22
24	C区Ⅰ－1	石　臼	32.8	[32.5]	9.8	[7,500.0]	褐　灰	粗粒安山岩	残　7/8	22
25	C区Ⅰ－1	石　臼	[26.7]	[13.5]	7.1	[3,050.0]	灰オリーブ	粗粒安山岩	残　1/2	22
26	C区Ⅰ－1	石　臼	[16.4]	[18.5]	9.3	[3,500.0]	褐　灰	粗粒安山岩	残　1/5	22
27	C区Ⅰ－1	石　臼	[15.6]	27.4	13.3	[6,500.0]	褐　灰	粗粒安山岩	残　1/2	22
28	C区Ⅰ－1	石　臼	[13.4]	[9.3]	9.8	[1,100.0]	褐　灰	粗粒安山岩	残　1/5	22
29	C区　表採	石製品	[9.2]	[15.3]	11.0	[1,600.0]	灰　褐	粗粒安山岩	残　1/2	22

註）表の記載は以下の基準で行った。

1．色調は石器・石製品の外面で観察し、色名は新版標準土色帖（小山・竹原，1976）によった。

2．大きさ・重さの単位はそれぞれ㎝・g であり、現存値を［ ］、復元値を（ ）で示した。

Tab. 3　元総社明神遺跡瓦観察表

番号	出土地	種別	厚さ (cm)	胎土		焼成		成形技法							整形技法					摘要	Fig
				素地	夾雑物	焼き上り	色調	粘土版剥取 凹面	粘土版剥取 凸面	作り	桶寄 木痕	粘土版 合せ目	布の 合せ目	叩目	轆轤痕	篦削	布の擦消 凹面	布の擦消 凸面	則部面取		
1	A区W－1	女瓦	2.6	並	多	硬	暗灰	－	－	一か	－	－	－	－	縦撫	－	○	－	－	吉井	23
2	A区W－1	女瓦	2.5	密	並	締	暗灰	－	－	一か	－	－	－	－	縦撫	－	－	－	端2	乗附	23
3	A区W－2	男瓦	2.1	並	多	硬	暗灰	－	－	半截	－	○S	－	－	斜撫	－	－	－	側2	吉井	23
4	A区W－2	男瓦	1.6	粗	少	軟	橙	－	－	半截	－	－	－	－	不詳	－	－	－	－	再燃 秋間	23
5	A区W－2	女瓦	2.0	並	多	硬	橙	○	－	一作	－	－	－	縄密撫	縦撫	－	－	－	－	吉井	23
6	A区Ⅰ－1	男瓦	1.3	並	並	硬	暗灰	－	－	半截	－	－	－	－	轆轤	－	－	－	端1側3	秋間	23
7	A区Ⅰ－1	瓦塼	2.6	密	少	締	灰白	－	－	一作	－	－	－	－	撫	－	－	－	－	秋間	23
8	A区Ⅰ－1	男瓦	1.7	密	少	締	暗灰	－	－	半截	○	－	－	－	轆轤	－	－	－	側3	秋間	23
9	B区　表採	女瓦	1.9	並	少	硬	灰白	－	－	一作	○	－	－	－	縦撫	－	－	－	－	秋間	23
10	B区　表採	女瓦	2.0	並	多	硬	橙	－	－	一作	－	－	－	－	縦撫	－	－	－	－	吉井	23
11	C区　表採	男瓦	2.5	並	多	硬	橙	－	－	半截	－	－	－	－	縦撫	－	－	－	－	吉井	23
12	C区　表採	桟瓦	1.8	密	少	締	鈍橙	－	－	一作	－	－	－	－	撫	－	－	－	端3側1	藤岡	23

註）表の記載は以下の基準で行った。

1．胎土・素地は粗・並・密の3段階評価。

2．焼成・焼き上りは軟・並・硬・締の4段階評価。

元総社明神遺跡出土の瓦類に就いて

木　津　博　明

元総社明神遺跡は、過去10年に亘り発掘調査を実施している。筆者等は、当該遺跡の既刊報告書等の作成に当たり、出土瓦類の観察を依頼され実施して来た。この観察趣旨・結果に就いては、既刊報告書中に記述した。

今次は、当該報告区より出土した12点の瓦類を観察した。この12点の瓦類の内訳は、男瓦5点・女瓦5点・瓦塼1点・桟瓦1点である。この12点の瓦類の観察結果はTab. 3に一覧表化した。

この12点の観察結果から特筆される点を以下に記述する。

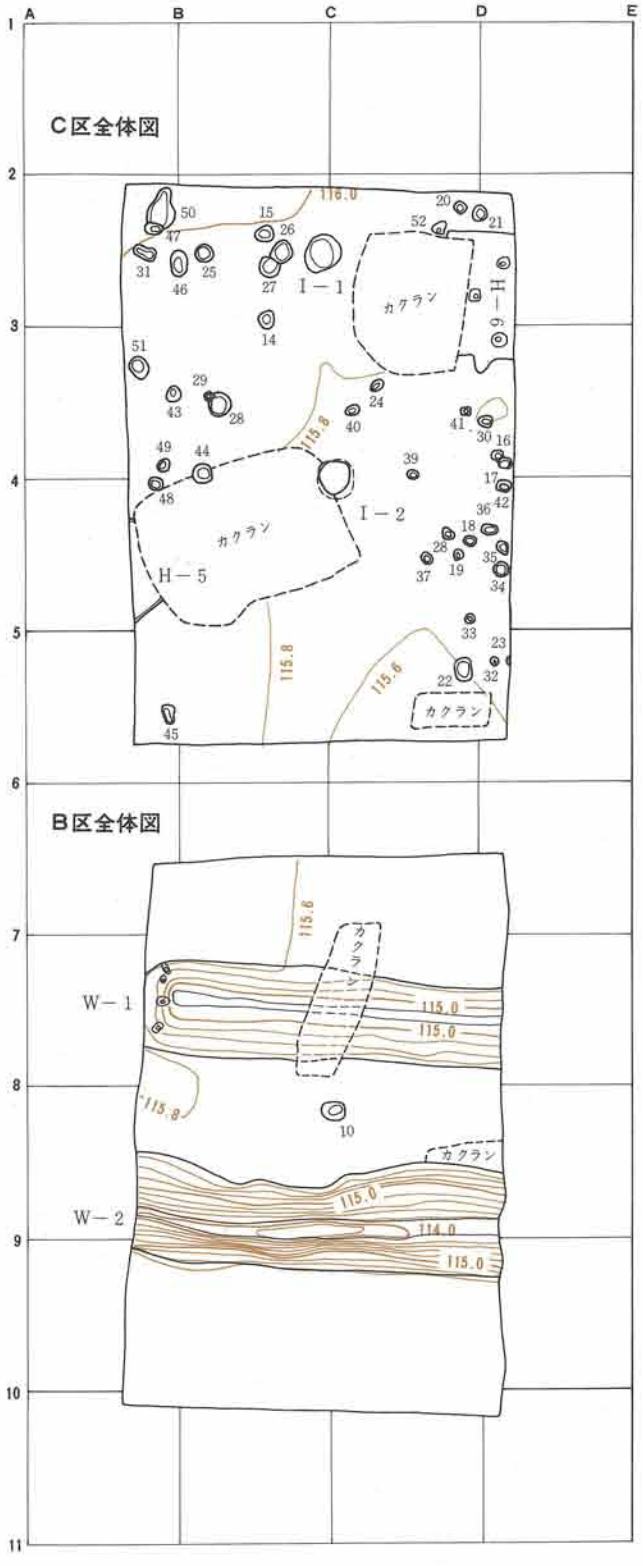
1．瓦　　塼

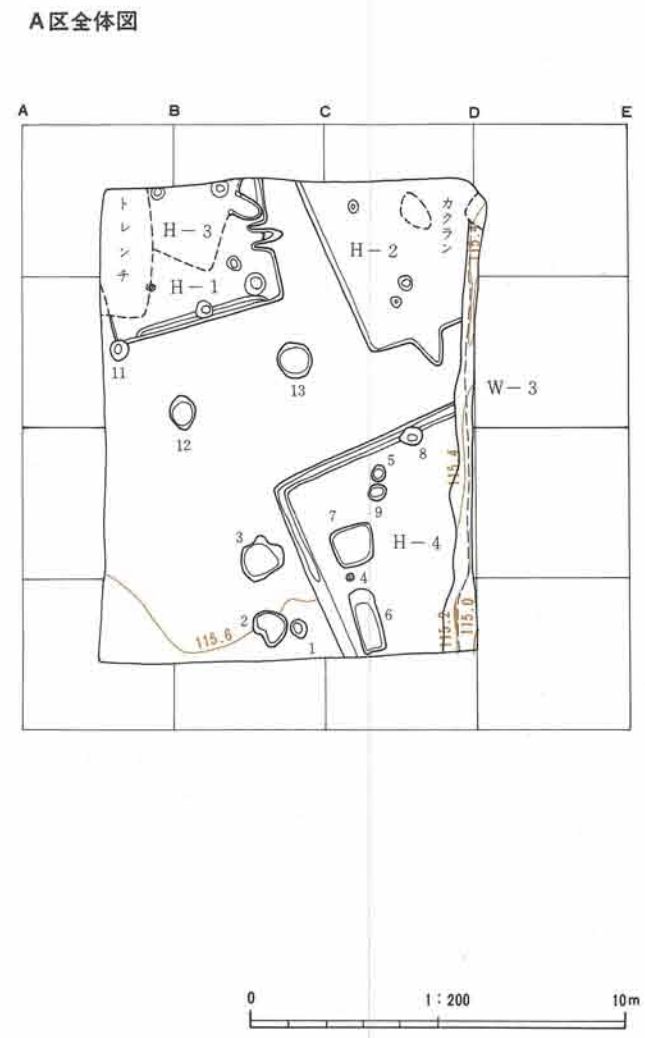
瓦塼は、筆者等が当該地域出土の瓦類では初見である。これらの瓦類の出土位置は、推定国府域の政庁と東辺築地の中間ほどの位置に当たっている。この瓦塼の使用された建物は、国府内の主要建物の一つであったことが推定される。出土地を重要視すれば、至近の位置に瓦塼使用建物が存在したことが考えられる。また、建物廃棄後の移動を想定しても、重要な施設の存在は確実視出来る。

2．出土瓦類の推定所産時期

出土瓦類の推定所産時期は、8世紀終末から9世紀代と推定され、少なくとも国府内の瓦葺き建物が9世紀代に確実に存在したことが指摘出来る。

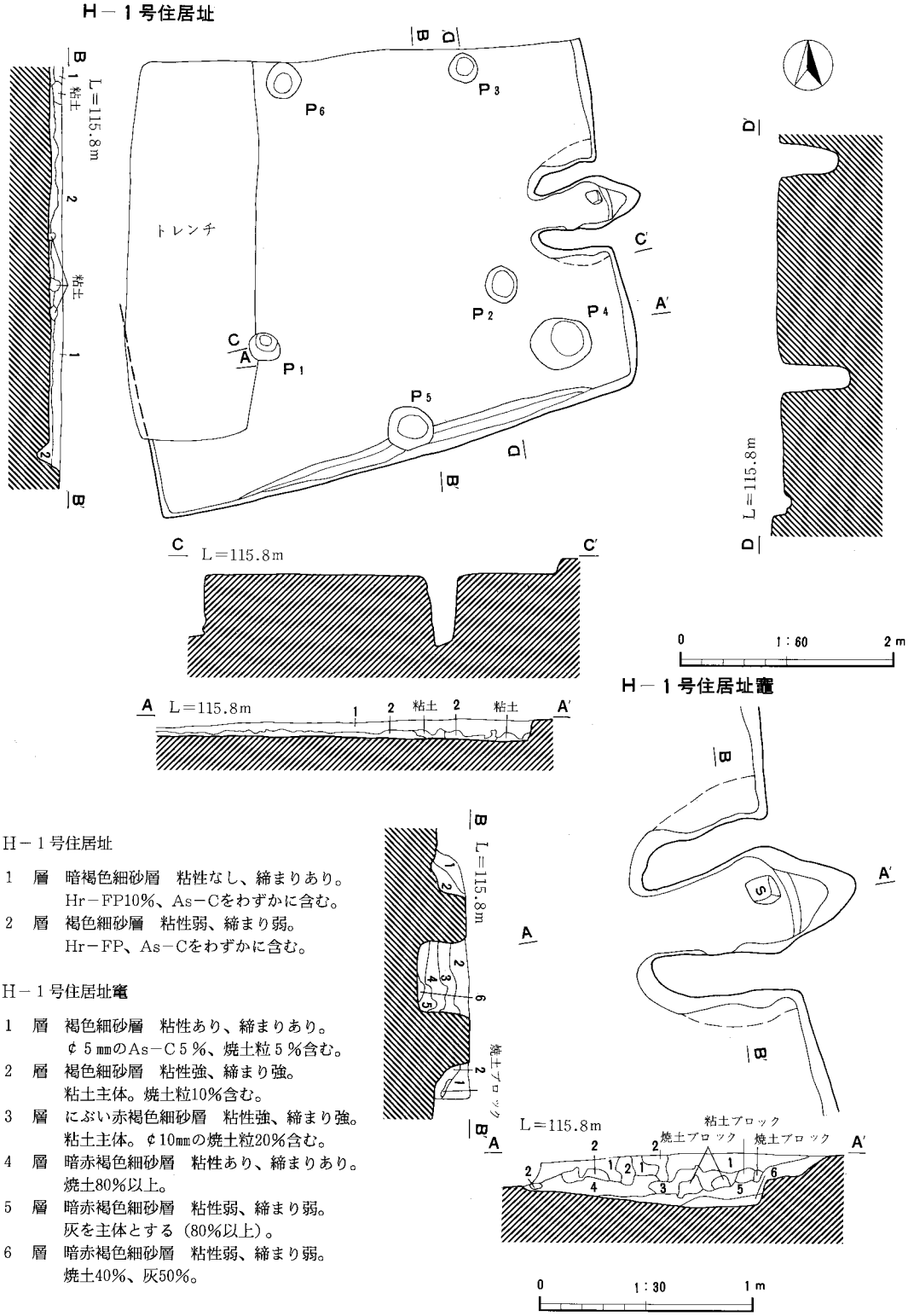
今次の12点の瓦類からは上記2点の指摘に留めておきたい。これは、未だ未見の瓦類の出土がある点と、今後も継続される調査に伴い瓦類の出土も見込まれる点から、今後の調査実態を踏まえ総括したい。





註）土坑については、記載上繁雑になるため、(D－　)を省略した。

Fig. 8　元総社明神遺跡のトレンチ全体図



H－1号住居址

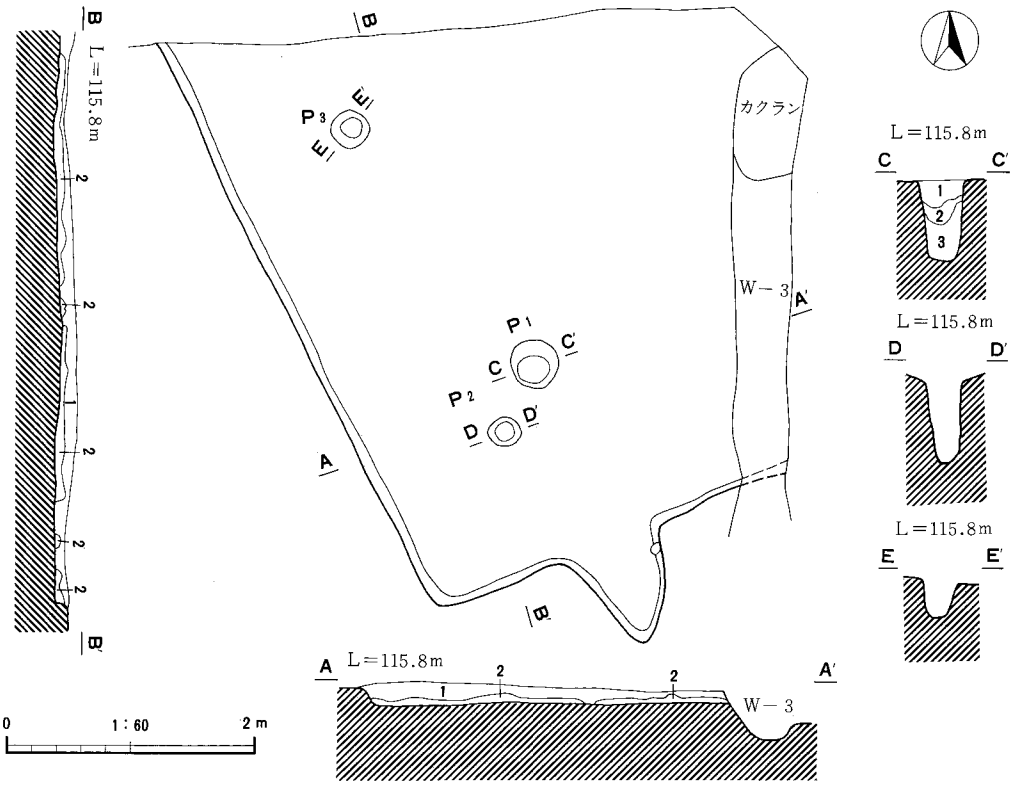
1　層　暗褐色細砂層　粘性なし、締まりあり。
　　Hr－FP10%、As－Cをわずかに含む。
2　層　褐色細砂層　粘性弱、締まり弱。
　　Hr－FP、As－Cをわずかに含む。

H－1号住居址竈

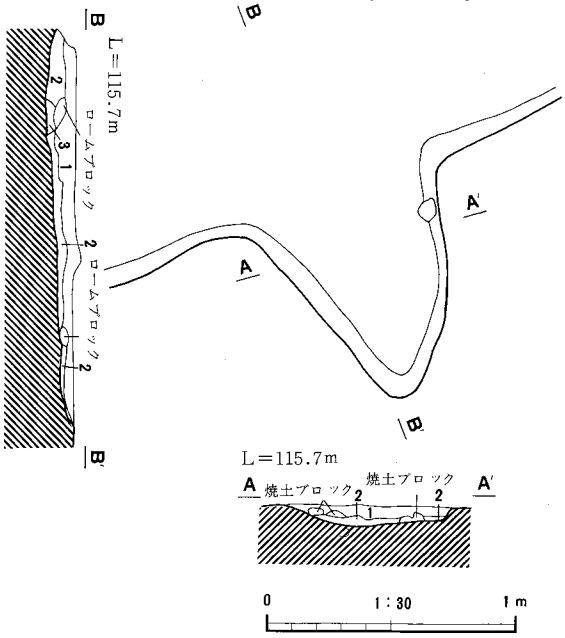
1　層　褐色細砂層　粘性あり、締まりあり。
　　¢5㎜のAs－C5%、焼土粒5%含む。
2　層　褐色細砂層　粘性強、締まり強。
　　粘土主体。焼土粒10%含む。
3　層　にぶい赤褐色細砂層　粘性強、締まり強。
　　粘土主体。¢10㎜の焼土粒20%含む。
4　層　暗赤褐色細砂層　粘性あり、締まりあり。
　　焼土80%以上。
5　層　暗赤褐色細砂層　粘性弱、締まり弱。
　　灰を主体とする（80%以上）。
6　層　暗赤褐色細砂層　粘性弱、締まり弱。
　　焼土40%、灰50%。

Fig. 9　A区遺構(1)：H－1号住居址

H－2号住居址



H－2号住居址竈



H－2号住居址

1　層　暗褐色細砂層　粘性なし、締まりあり。
　　Hr－FP10%、As－Cをわずかに含む。
2　層　褐色細砂層　粘性弱、締まり弱。
　　Hr－FP、As－Cをわずかに含む。

H－2号住居址竈

1　層　暗褐色細砂層　粘性なし、締まり弱。
　　Hr－FP5%、As－Cをわずかに含む。焼土10%入る。
2　層　褐色細砂層　粘性なし、締まりなし。
　　Hr－FP、As－Cをわずかに含む。焼土5%、炭化物がわずかに入る。
3　層　褐色細砂層　粘性あり、締まりあり。
　　Hr－FP、As－Cをわずかに含む。

H－2号住居址P1

1　層　暗褐色細砂層　粘性なし、締まりあり。
　　Hr－FP10%、As－Cをわずかに含む。
2　層　褐色細砂層　粘性弱、締まり弱。
　　Hr－FP、As－Cをわずかに含む。
3　層　褐色細砂層　粘性なし、締まりなし。

Fig.10　A区遺構(2)：H－2号住居址

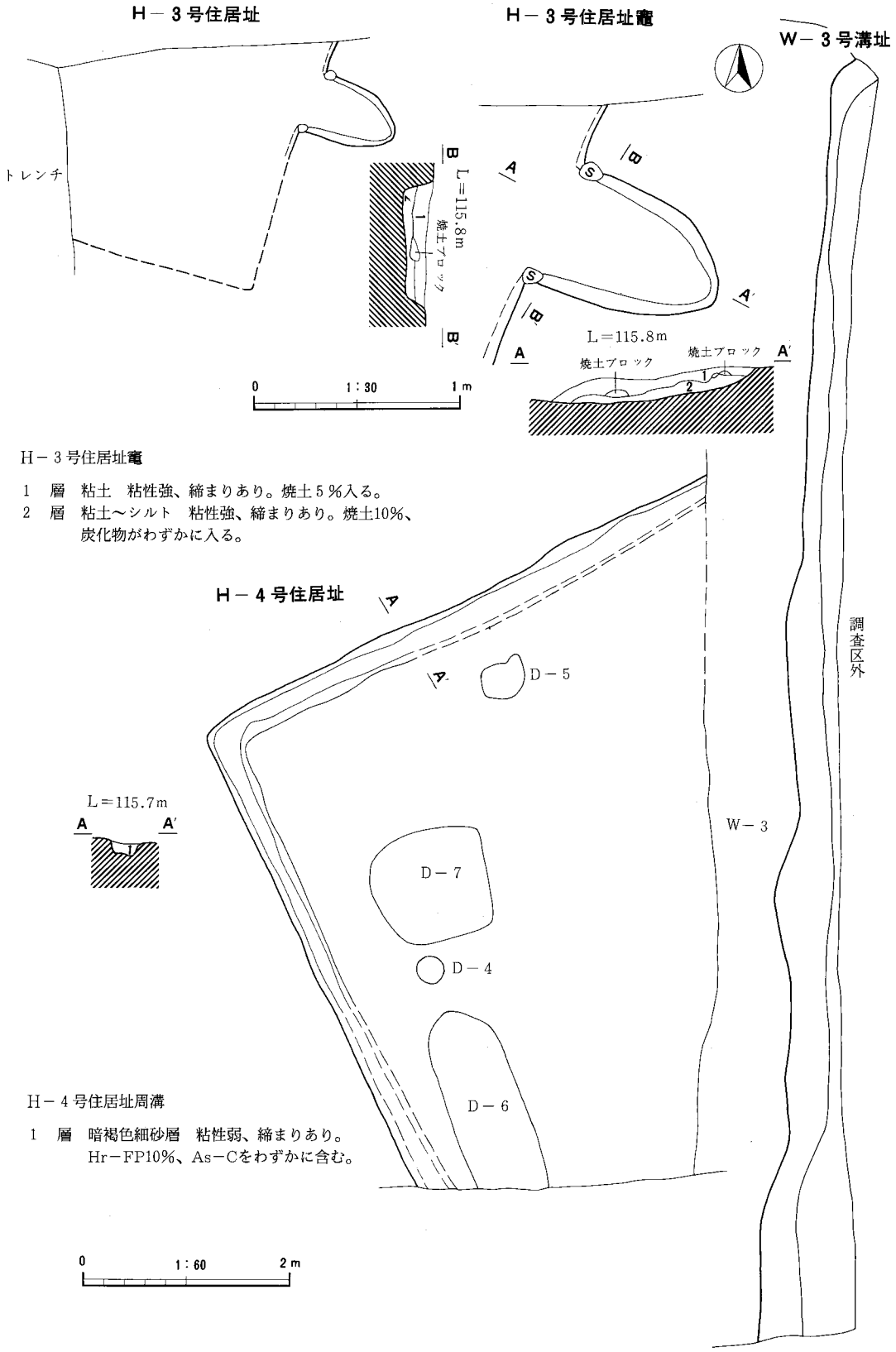
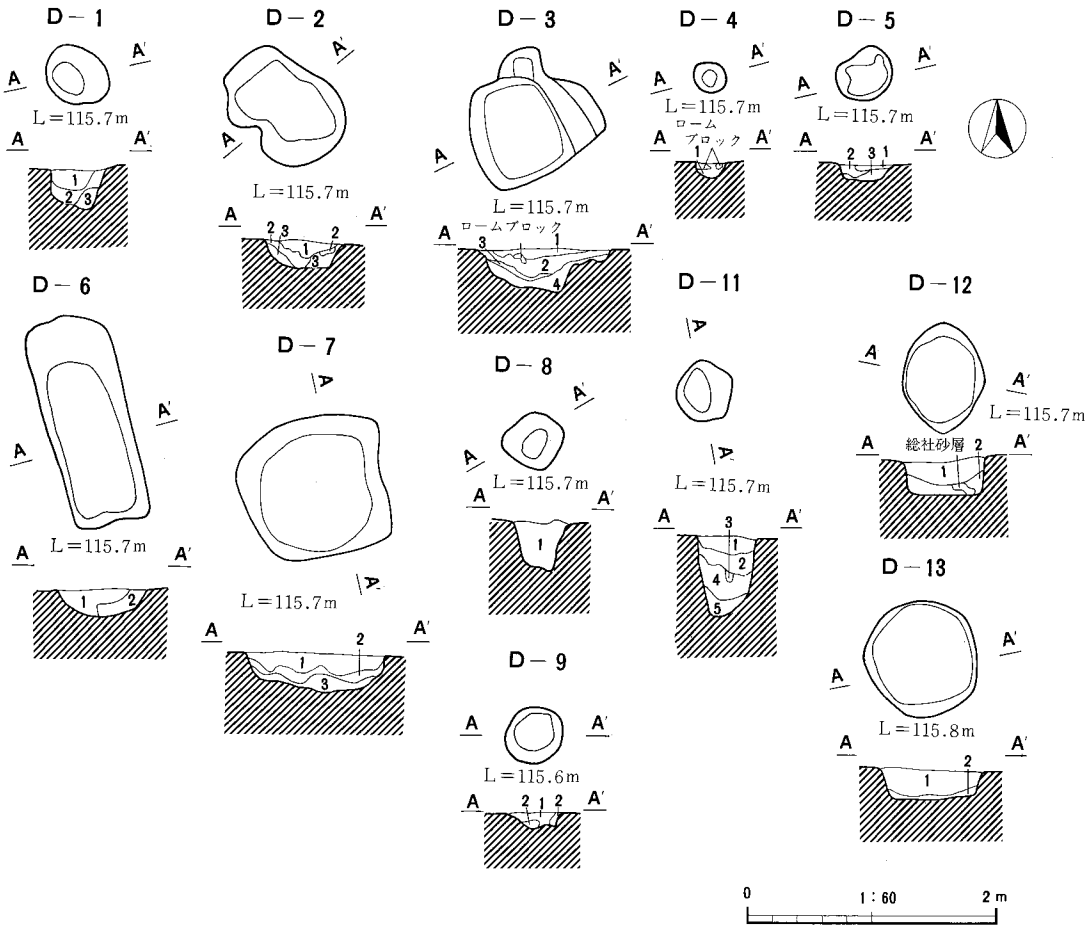


Fig.11　A区遺構(3)：H－3・H－4号住居址，W－3号溝址



D－1号土坑

1　層　暗褐色細砂層
2　層　暗褐色細砂層
3　層　褐色細砂層

D－2号土坑

1　層　暗褐色細砂層
2　層　褐色細砂層
3　層　褐色細砂層

D－3号土坑

1　層　暗褐色細砂層
2　層　暗褐色細砂層
3　層　褐色細砂層
4　層　褐色細砂層

D－4号土坑

1　層　暗褐色細砂層

D－5号土坑

1　層　暗褐色細砂層
2　層　暗褐色細砂層
3　層　褐色細砂層

D－6号土坑

1　層　暗褐色細砂層
2　層　褐色細砂層

D－7号土坑

1　層　暗褐色細砂層
2　層　褐色細砂層
3　層　褐色細砂層

D－8号土坑

1　層　暗褐色細砂層

D－9号土坑

1　層　暗褐色細砂層
2　層　褐色細砂層

D－11号土坑

1　層　暗褐色細砂層
2　層　暗褐色細砂層
3　層　黒褐色微砂層
4　層　暗褐色細砂層
5　層　暗褐色細砂層

D－12号土坑

1　層　褐色細砂層
2　層　にぶい褐色細砂層

D－13号土坑

1　層　にぶい黄褐色粗砂層
2　層　明黄褐色細砂層

Fig.12　A区遺構(4)：土坑（D～1～9・11～13号土坑）

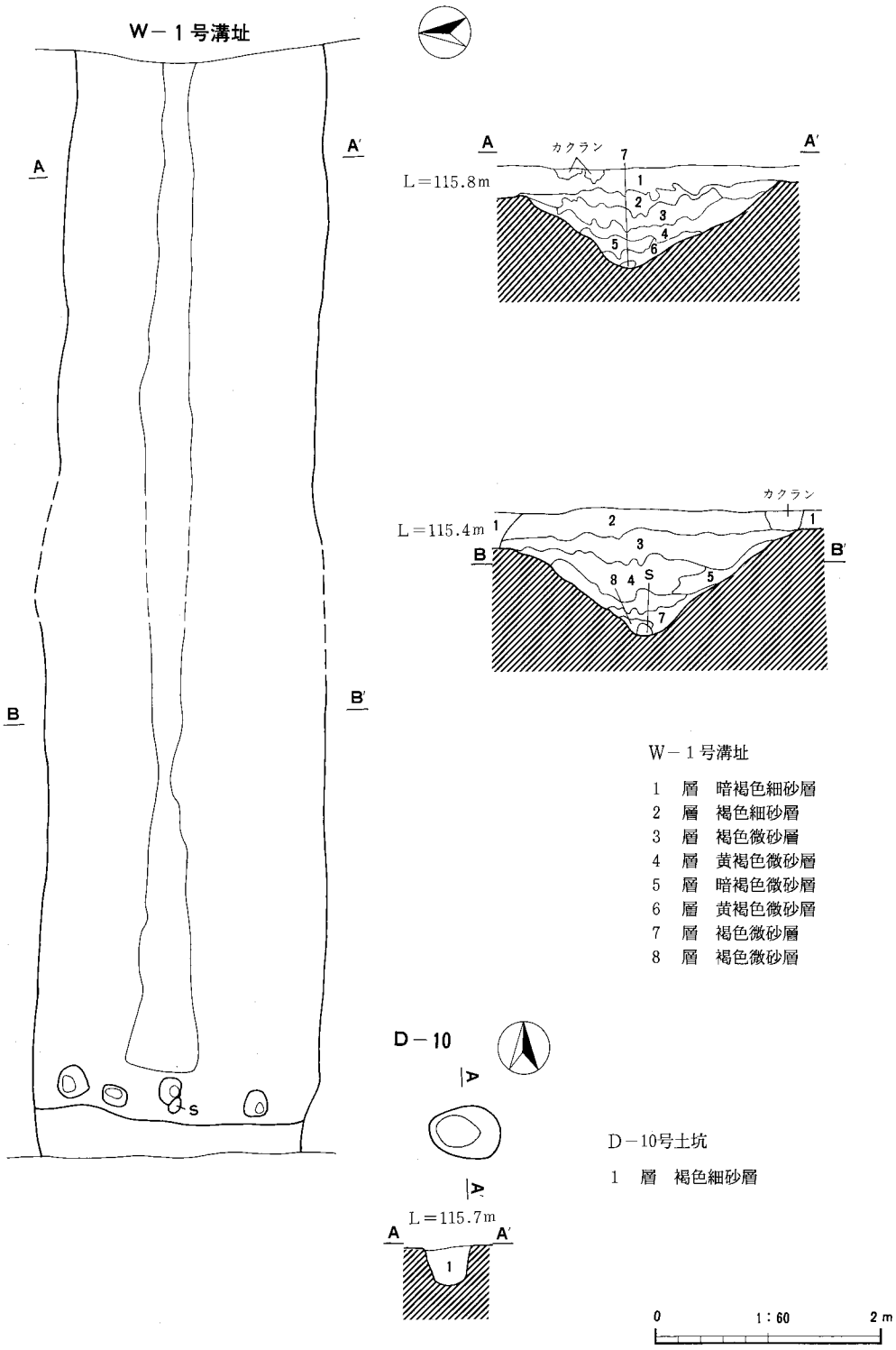
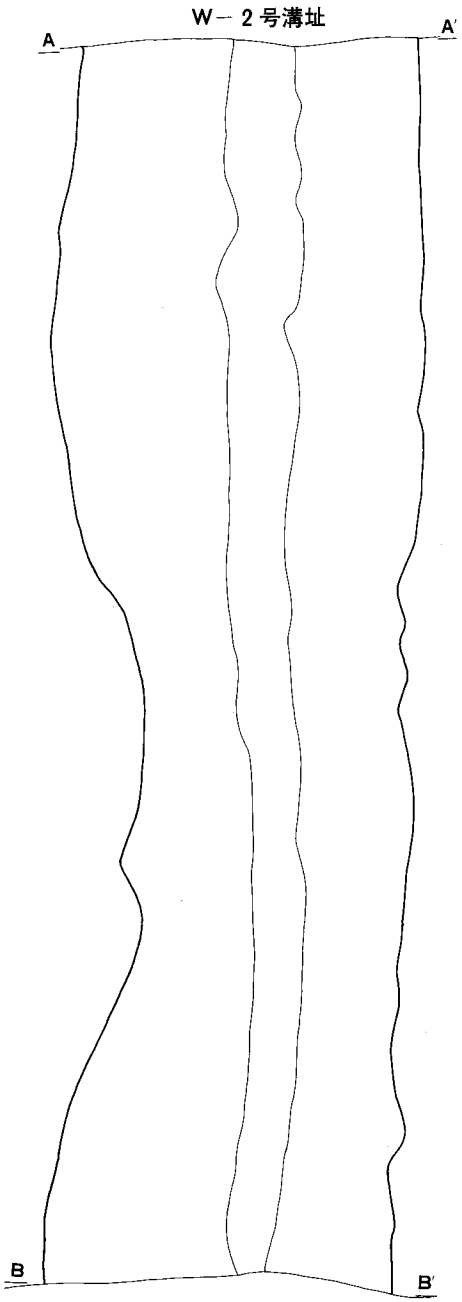
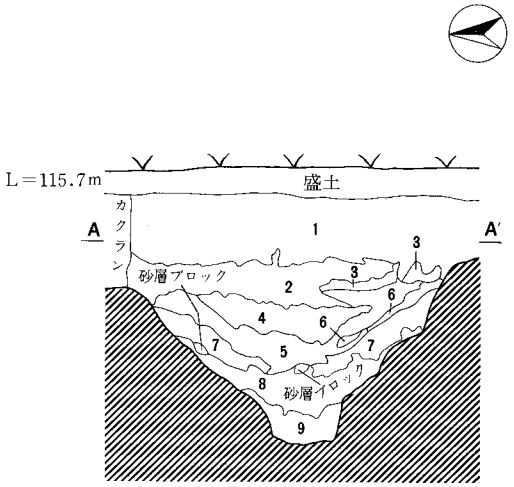


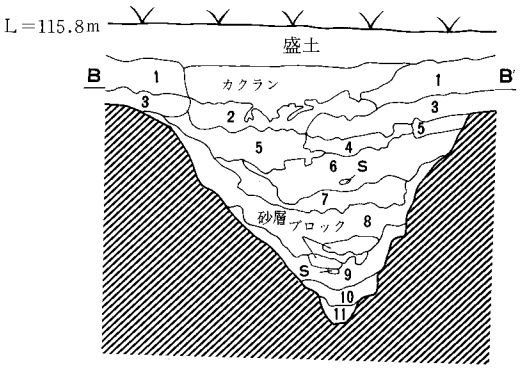
Fig.13 B区遺構(1)：W－1号溝址，D－10号土坑





W－2号溝址

1　層　暗褐色細砂層
2　層　暗褐色細砂層
3　層　褐色細砂層
4　層　暗褐色細砂層
5　層　暗褐色細砂層
6　層　黒褐色細砂層
7　層　暗褐色細砂層
8　層　暗褐色細砂層
9　層　褐色細砂層
10　層　暗褐色微砂層
11　層　にぶい黄褐色シルト層



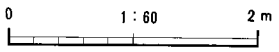
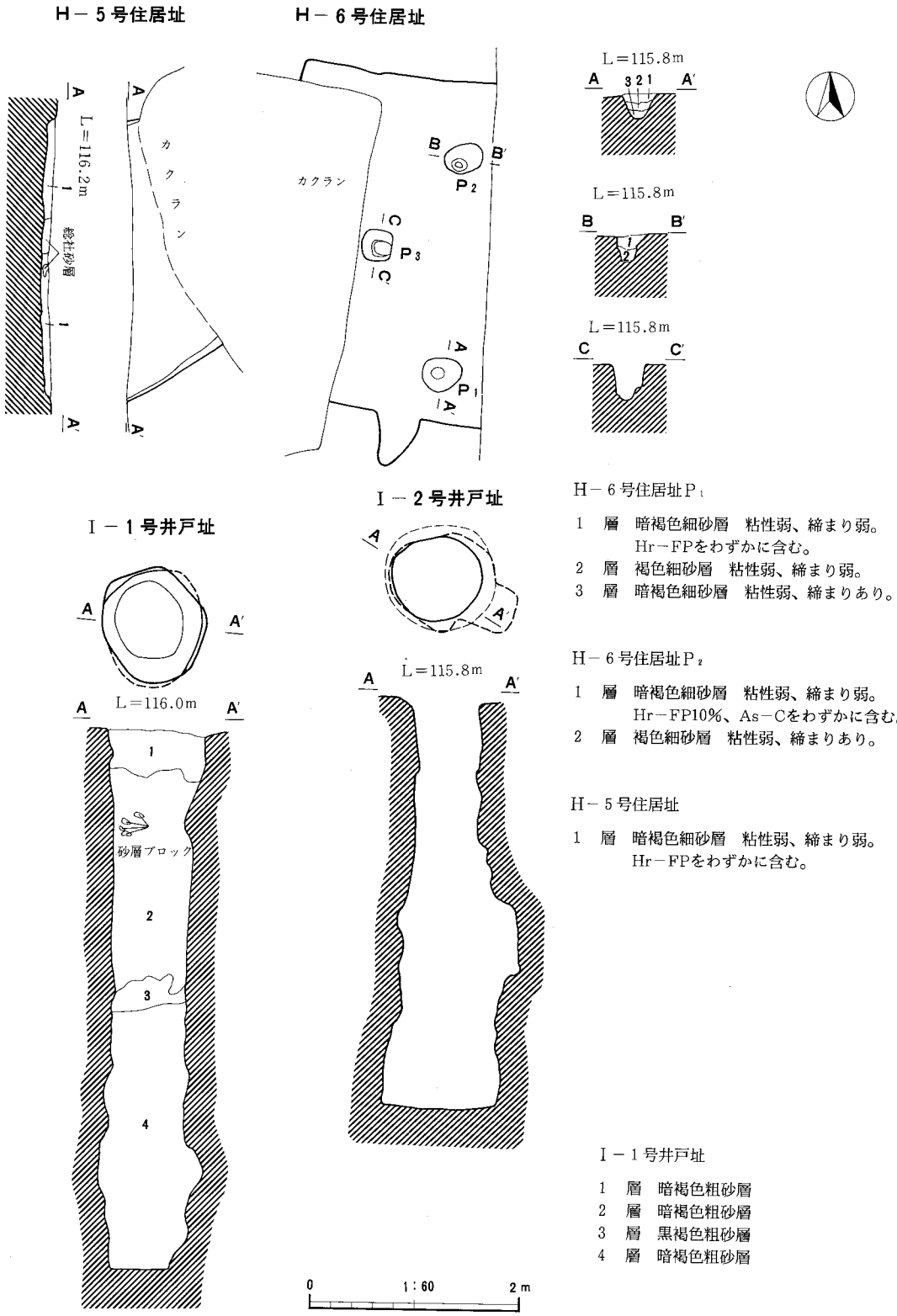


Fig.14　B区遺構(2)：W－2号溝址



H－6号住居址P1

1　層　暗褐色細砂層　粘性弱、締まり弱。
　　Hr－FPをわずかに含む。
2　層　褐色細砂層　粘性弱、締まり弱。
3　層　暗褐色細砂層　粘性弱、締まりあり。

H－6号住居址P2

1　層　暗褐色細砂層　粘性弱、締まり弱。
　　Hr－FP10%、As－Cをわずかに含む。
2　層　褐色細砂層　粘性弱、締まりあり。

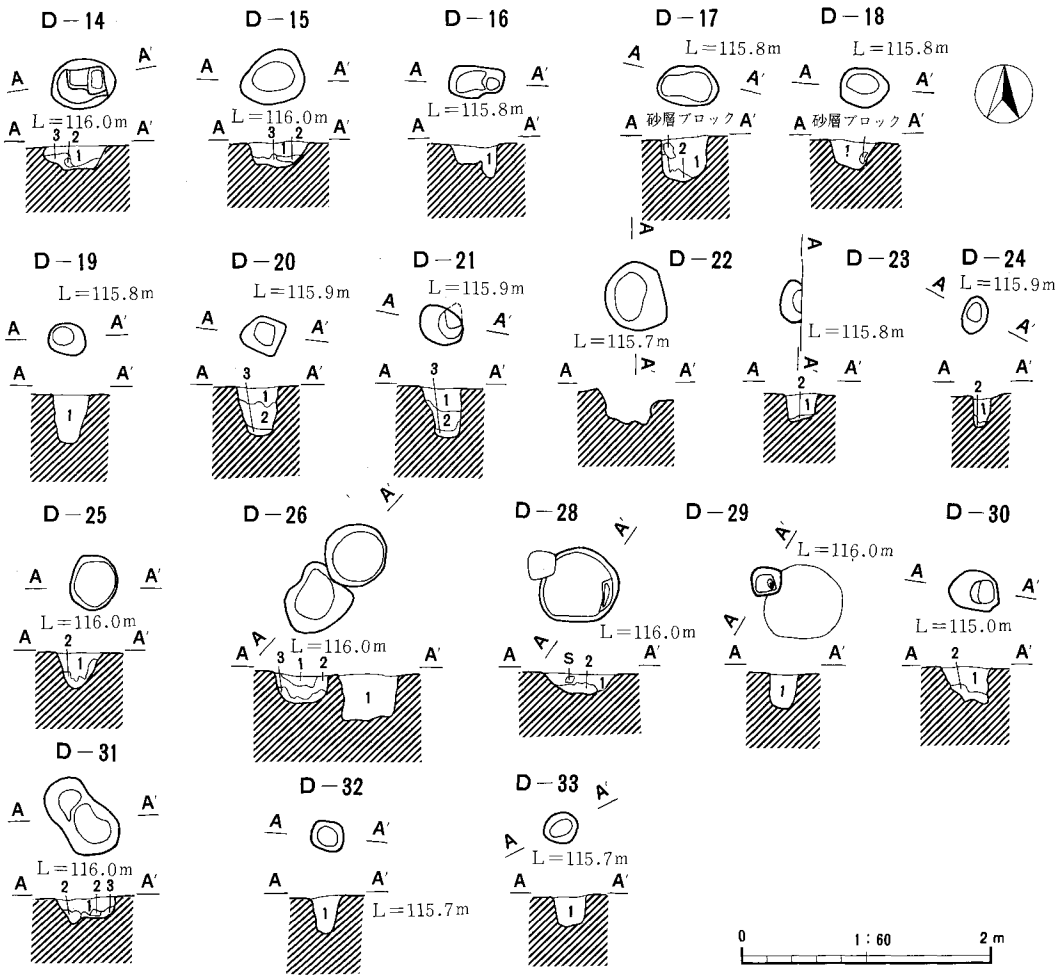
H－5号住居址

1　層　暗褐色細砂層　粘性弱、締まり弱。
　　Hr－FPをわずかに含む。

I－1号井戸址

1　層　暗褐色粗砂層
2　層　暗褐色粗砂層
3　層　黒褐色粗砂層
4　層　暗褐色粗砂層

Fig.15　C区遺構(1)：H－5・H－6号住居址，I－1・I－2号井戸址



D－14号土坑

1　層　暗褐色細砂層
2　層　黒褐色細砂層
3　層　褐色微砂層

D－15号土坑

1　層　暗褐色細砂層
2　層　黄褐色シルト層
3　層　褐色微砂層

D－16号土坑

1　層　褐色細砂層

D－17号土坑

1　層　暗褐色細砂層
2　層　褐色細砂層

D－18号土坑

1　層　褐色細砂層

D－19号土坑

1　層　褐色細砂層

D－20号土坑

1　層　黒褐色細砂層
2　層　暗褐色細砂層
3　層　褐色微砂層

D－21号土坑

1　層　暗褐色細砂層
2　層　褐色微砂層
3　層　黄褐色微砂層

D－23号土坑

1　層　暗褐色細砂層
2　層　褐色細砂層

D－24号土坑

1　層　暗褐色細砂層
2　層　褐色微砂層

D－25号土坑

1　層　暗褐色細砂層
2　層　褐色微砂層

D－26・27号土坑

1　層　黒褐色細砂層
2　層　暗褐色細砂層
3　層　褐色微砂層

D－28号土坑

1　層　暗褐色細砂層
2　層　褐色細砂層

D－29号土坑

1　層　暗褐色細砂層

D－30号土坑

1　層　暗褐色細砂層
2　層　褐色微砂層

D－31号土坑

1　層　暗褐色細砂層
2　層　暗褐色細砂層
3　層　褐色細砂層

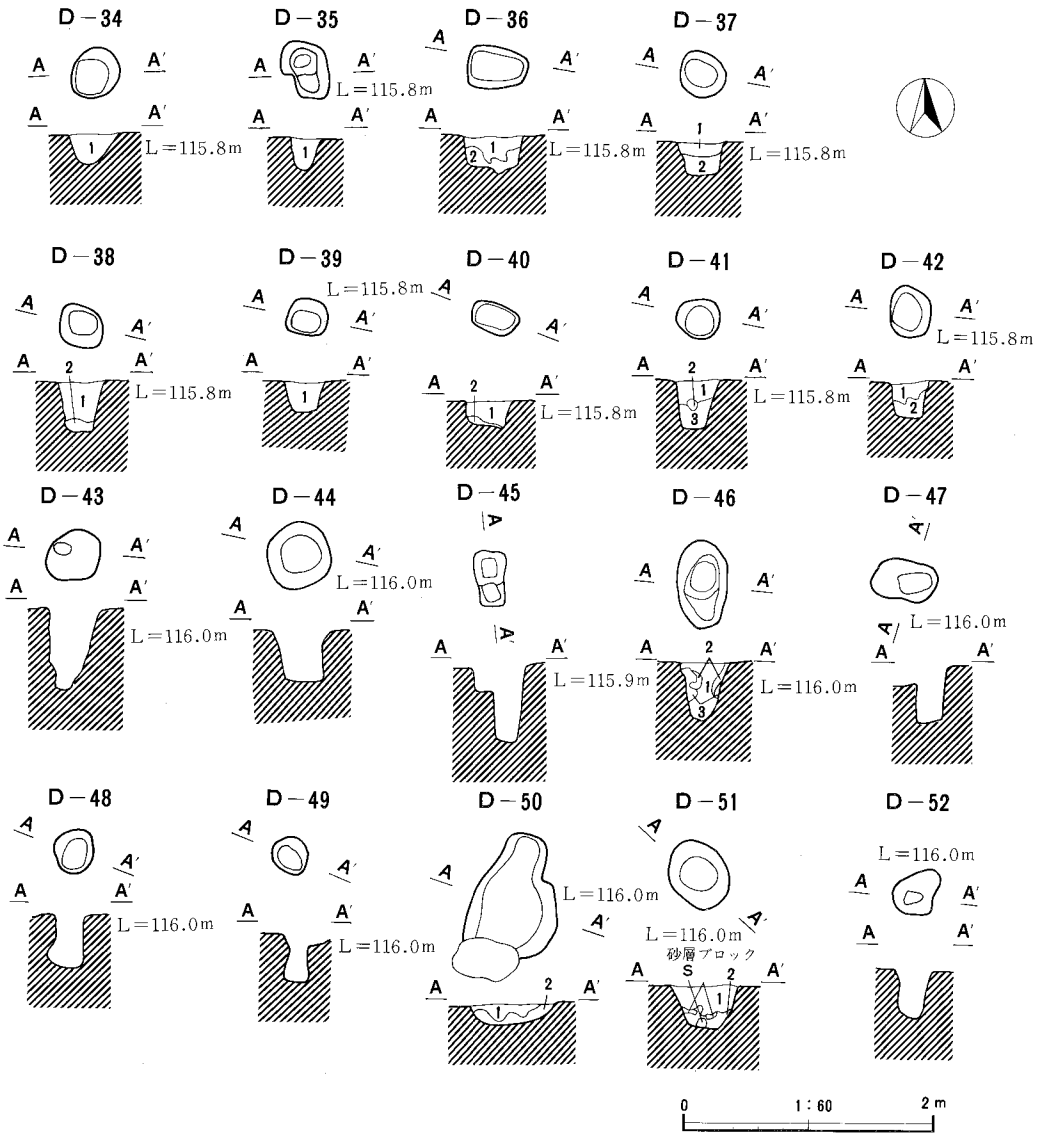
D－32号土坑

1　層　暗褐色細砂層

D－33号土坑

1　層　褐色細砂層

Fig.16　C区遺構(2)：土坑（D－14～33号土坑）



D－34号土坑

1　層　褐色細砂層

D－35号土坑

1　層　褐色細砂層

D－36号土坑

1　層　暗褐色細砂層
2　層　褐色細砂層

D－37号土坑

1　層　褐色細砂層
2　層　黄褐色微砂層

D－38号土坑

1　層　褐色細砂層
2　層　黄褐色微砂層

D－39号土坑

1　層　暗褐色細砂層

D－40号土坑

1　層　暗褐色細砂層
2　層　褐色微砂層

D－41号土坑

1　層　暗褐色細砂層
2　層　褐色微砂層
3　層　褐色細砂層

D－42号土坑

1　層　褐色細砂層
2　層　褐色微砂層

D－46号土坑

1　層　暗褐色細砂層
2　層　褐色細砂層
3　層　黄褐色細砂層

D－50号土坑

1　層　暗褐色細砂層
2　層　褐色細砂層

D－51号土坑

1　層　暗褐色細砂層
2　層　褐色細砂層

Fig.17　C区遺構(3)：土坑（D－34～52号土坑）

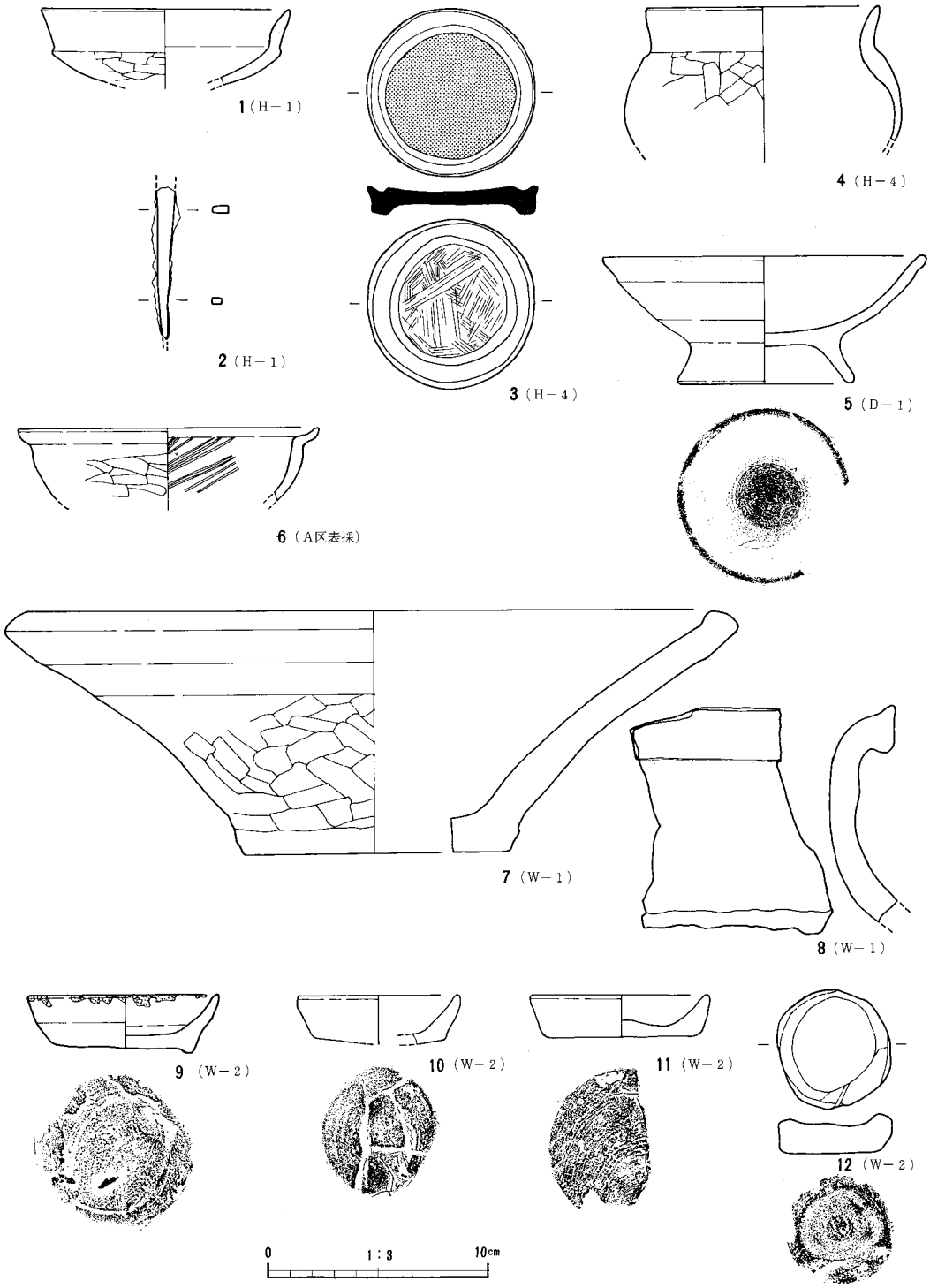


Fig.18　A・B区出土遺物

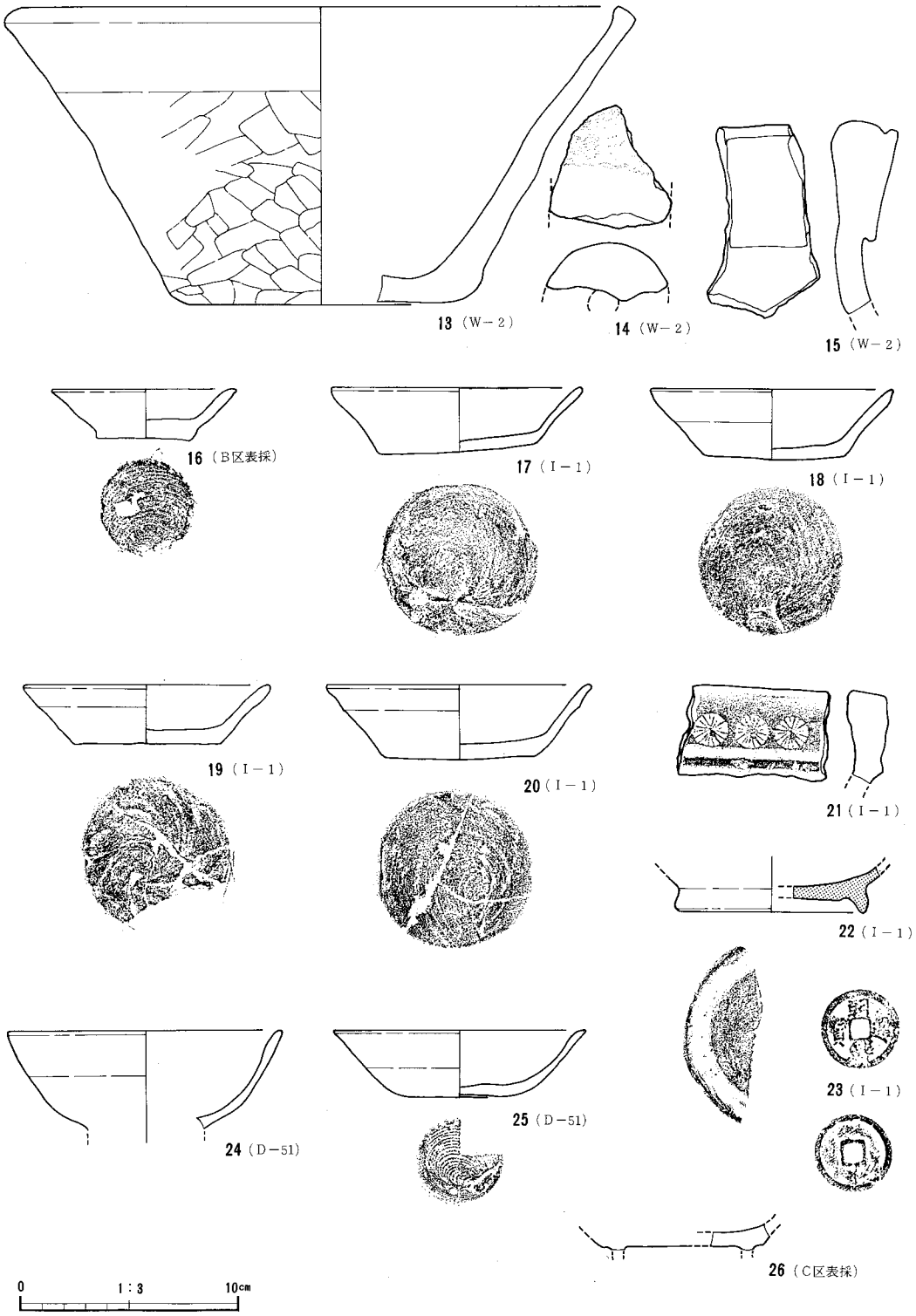


Fig.19　B・C区出土遺物

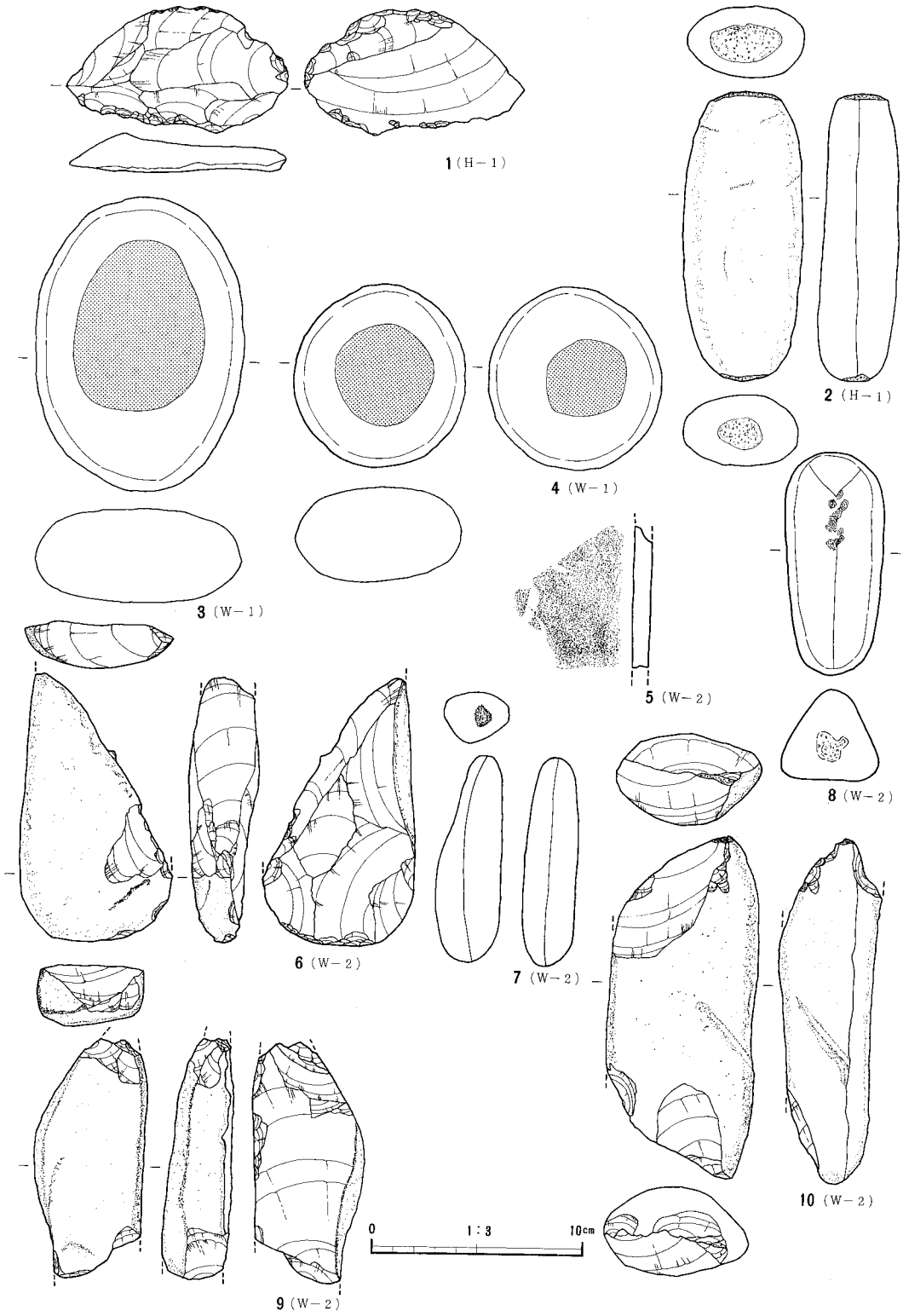


Fig.20　A区出土石器・石製品

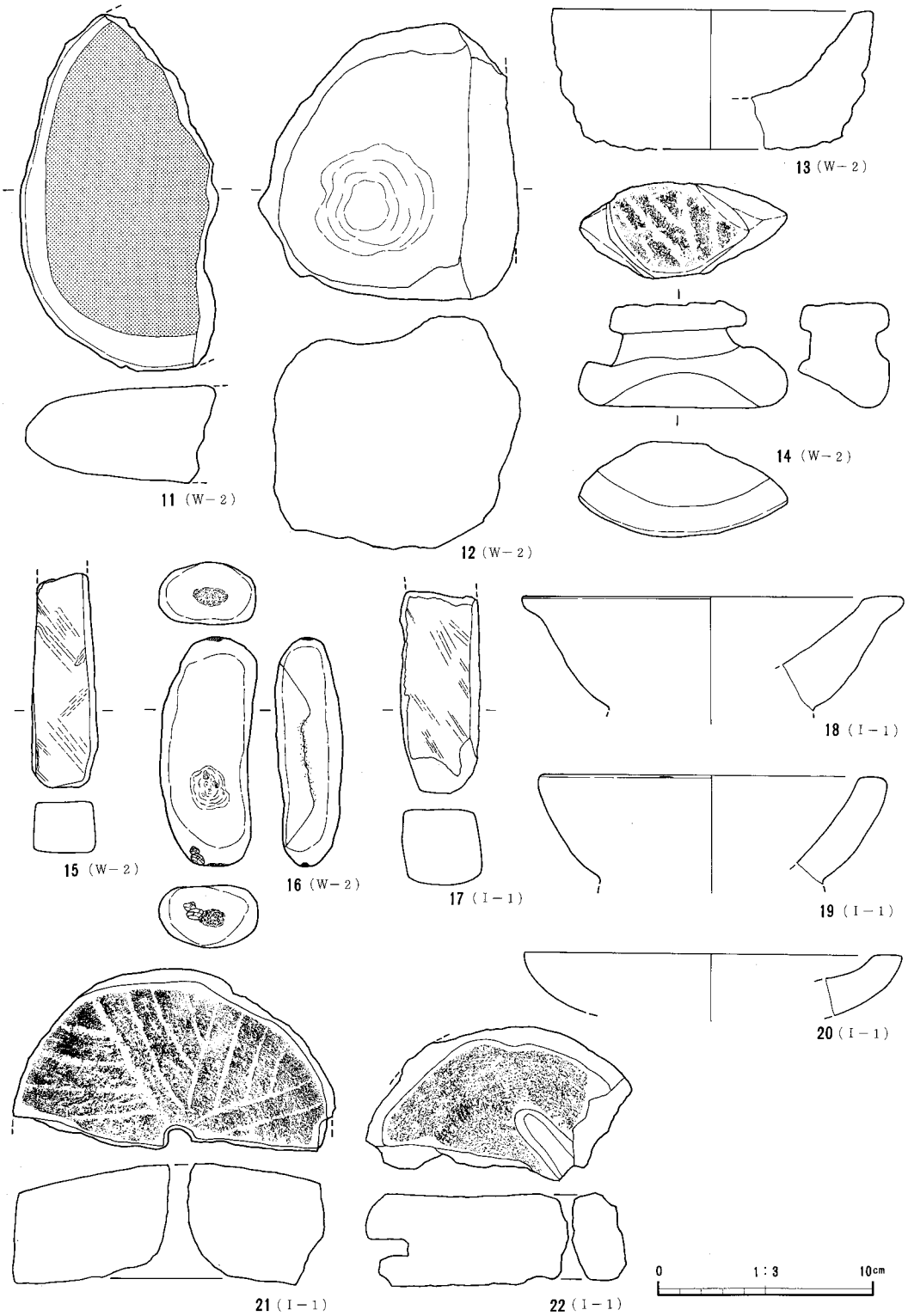


Fig.21　B・C区出土石器・石製品

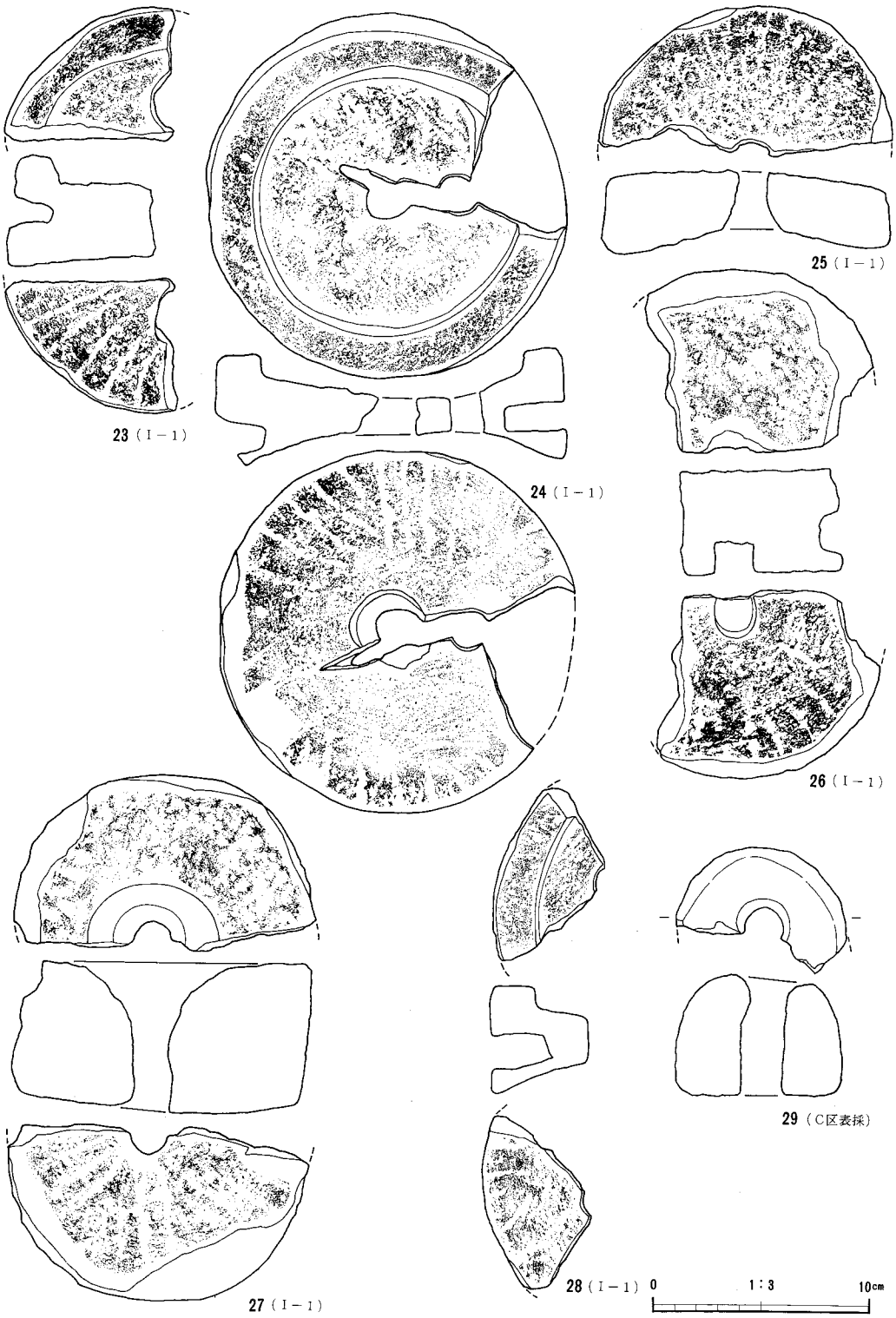


Fig.22　C区出土石器・石製品

Fig.23　元総社明神遺跡出土瓦

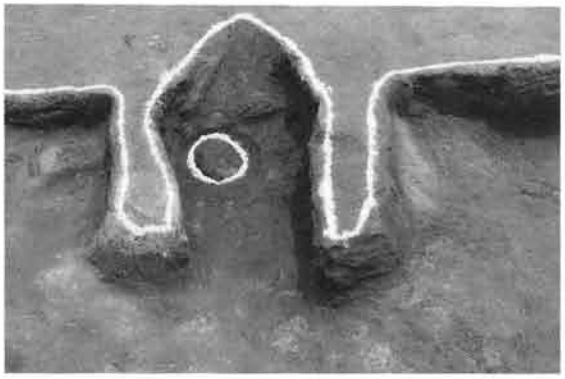
1．A区全景（西から）

2．深掘りセクション（南から）

3．A区調査前の様子（北から）

4．A区安全対策の様子（西から）

1．H－1号住居址（西から）



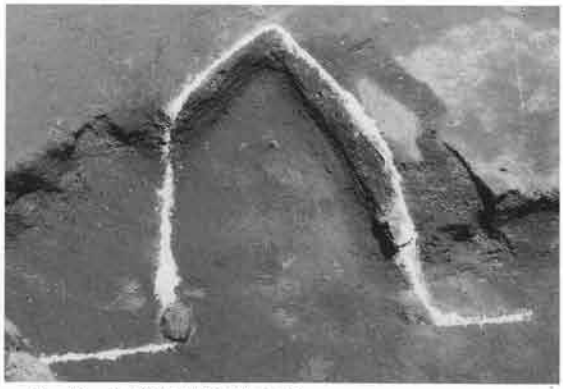
2．H－1号住居址竈（西から）

3．H－1号住居址竈掘り方（西から）

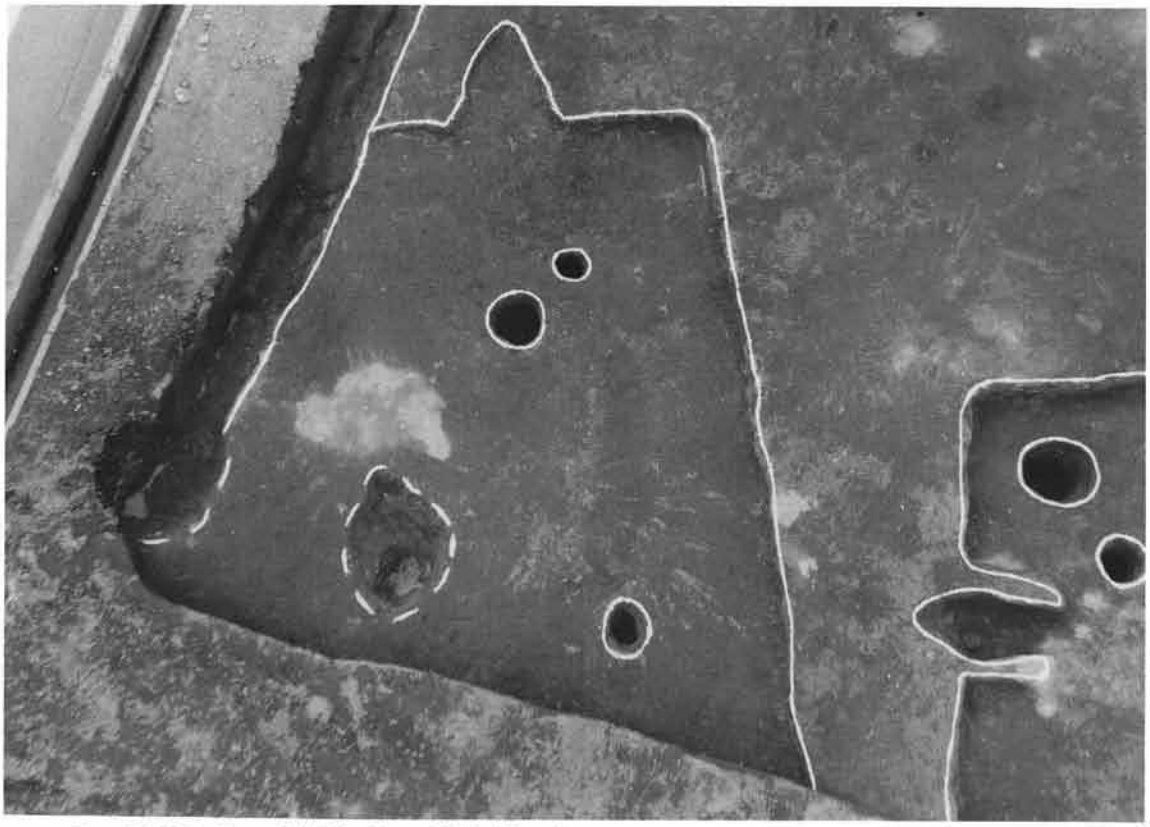
4．H－1号住居址竈セクション（西から）

5．H－1号住居址掘り方（西から）

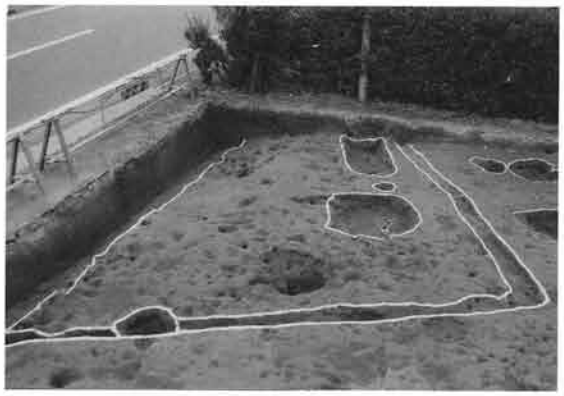
1．H－2号住居址（北から）



2．H－3号住居址竈（北から）

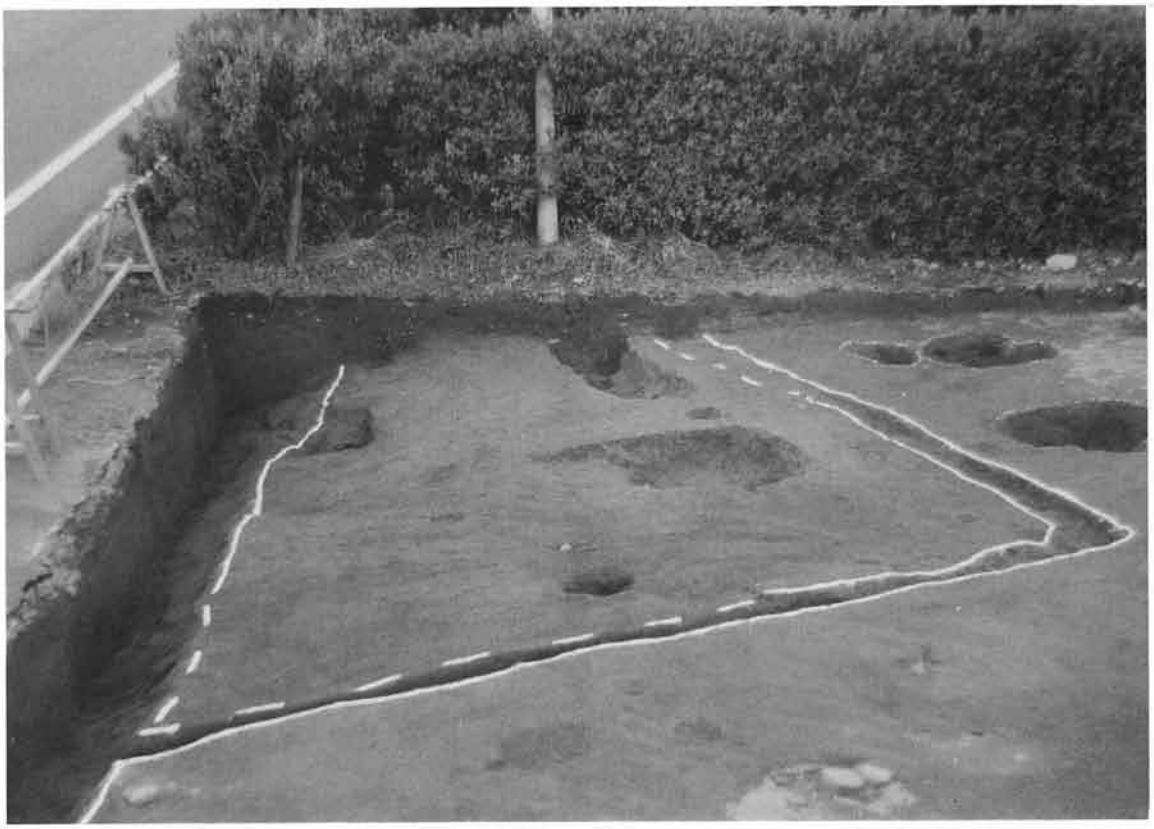


3．H－2号住居址，H－1号住居址，W－3号溝址（北から）



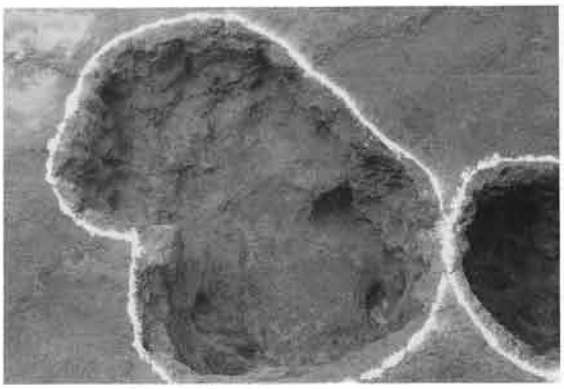
4．H－4号住居址掘り方（北から）

5．H－4号住居址の須恵円盤出土状態（南から）

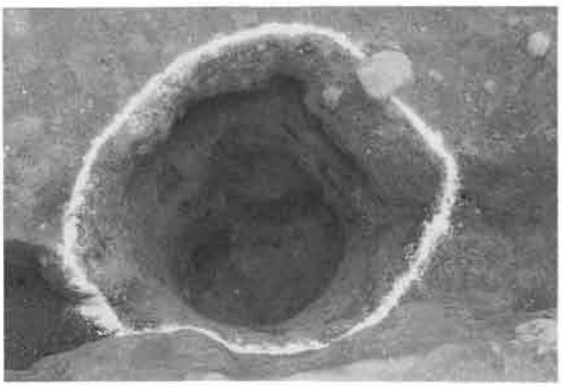


1．H－4号住居址，W－3号溝址（北から）

2．D－1号土坑遺物出土状態（南西から）

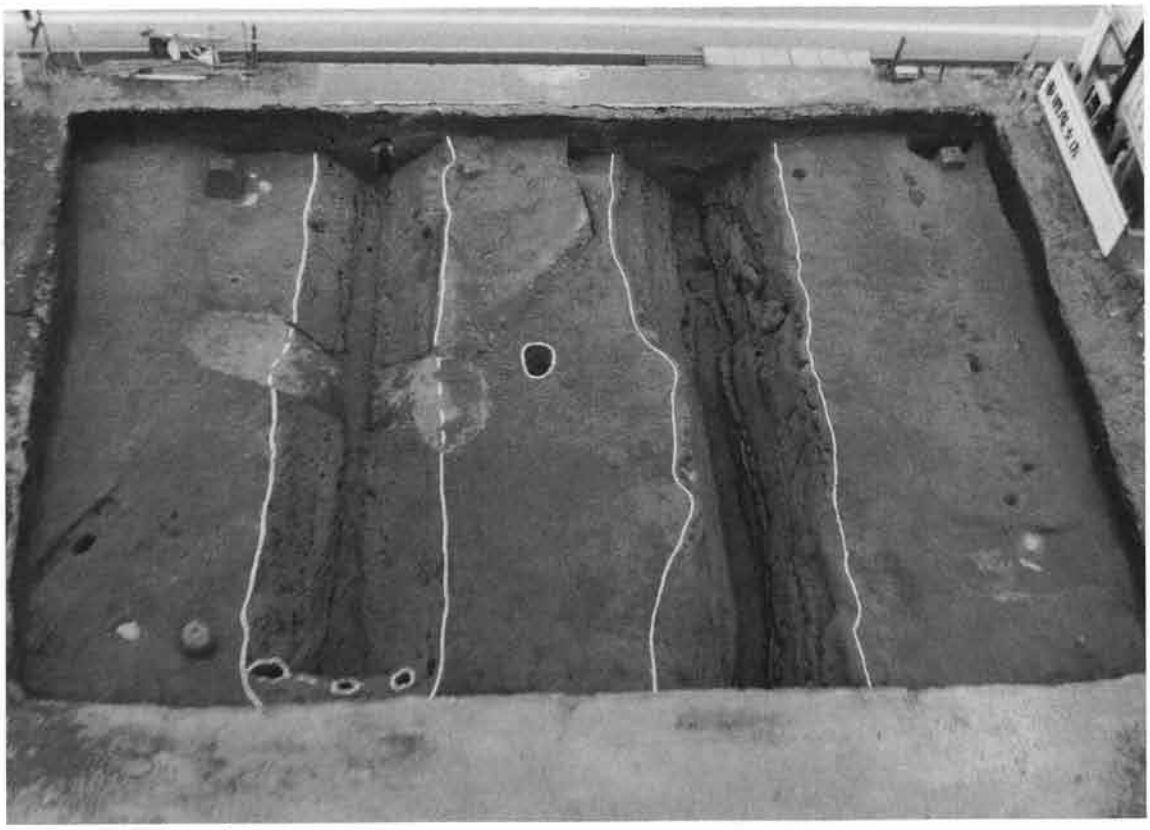


3．D－2号土坑（南から）



4．D－8号土坑（北から）

5．D－12号土坑（北から）



1．B区全景（西から）

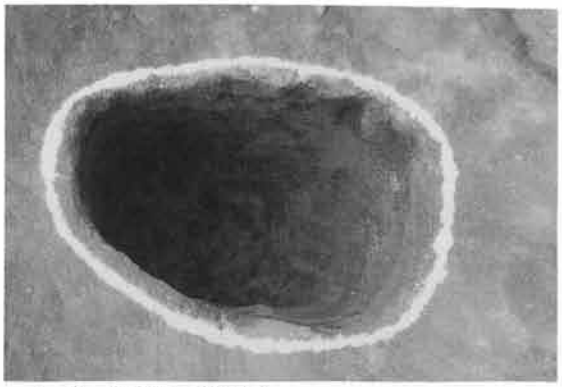
2．W－1号溝址（東から）

3．W－1号溝址セクション（西から）

4．W－2号溝址（東から）

5．W－2号溝址セクション（西から）

1．W－2号溝址遺物出土状態（東から）



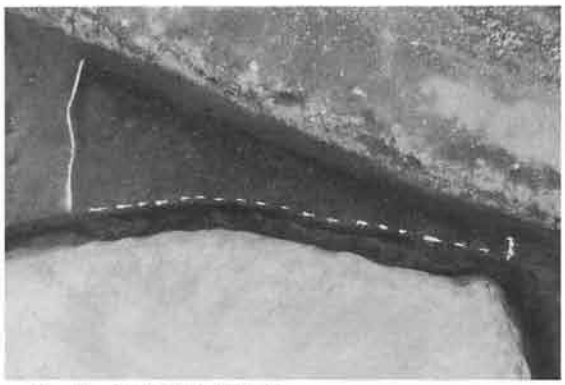
2．D－10号土坑（南から）

3．C区全景（西から）

4．I－1号井戸址掘り下げ風景（西から）

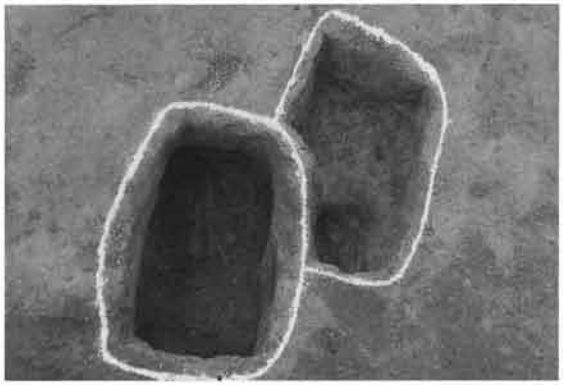
5．I－2号井戸址（北から）

1．H－6号住居址掘り方（北から）

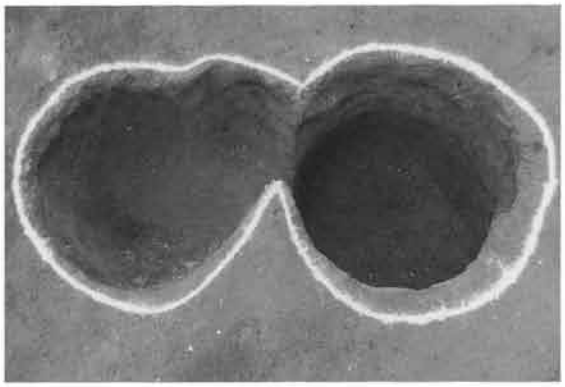


2．H－5号住居址（東から）

3．C区発掘作業風景



4．D－16・17号土坑（東から）

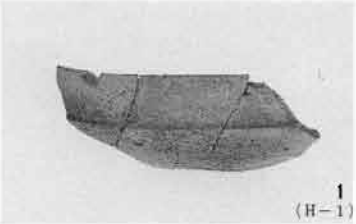


5．D－26・27号土坑（東から）

6．D－34号土坑（南から）

7．D－51号土坑遺物出土状態（北東から）

PL. 8


1
(H−1)

3
(H−4)

4
(H−4)

5
(D−1)

10
(W−2)

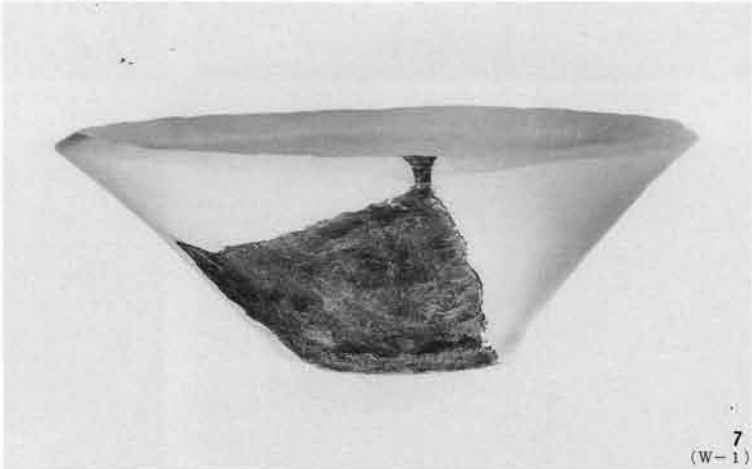
11
(W−2)

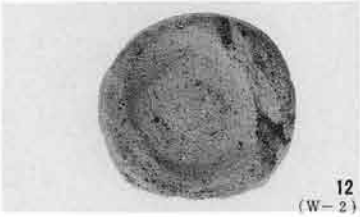
8
(W−1)

14
(W−2)

16
(B区表採)

9
(W−2)


7
(W−1)


12
(W−2)

17
(I−1)

13
(W−2)

18
(I−1)

19
(I−1)

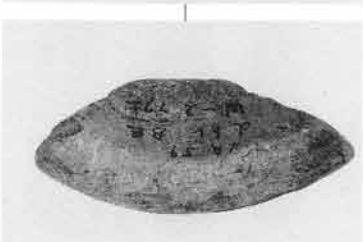
20
(I−1)

21
(I−1)

24
(D−51)

14
(W−2)

25
(D−51)



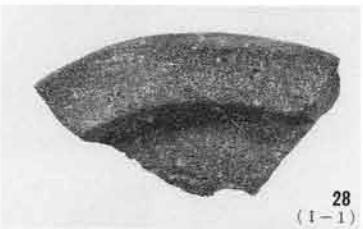
29
(C区表採)

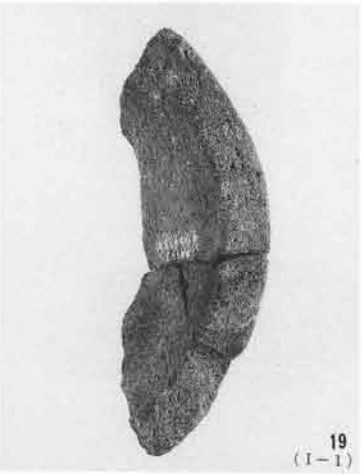
18
(I−1)

20
(I−1)

12
(W−2)

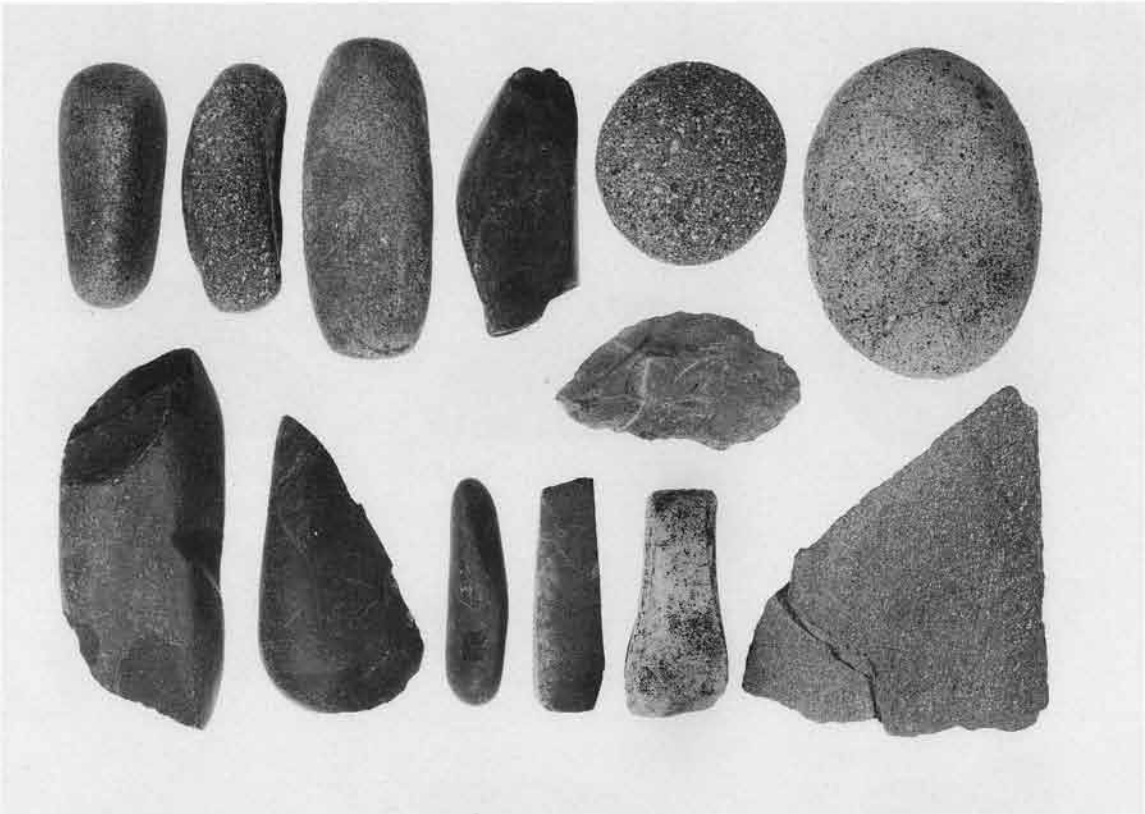
23
(I−1)


28
(I−1)

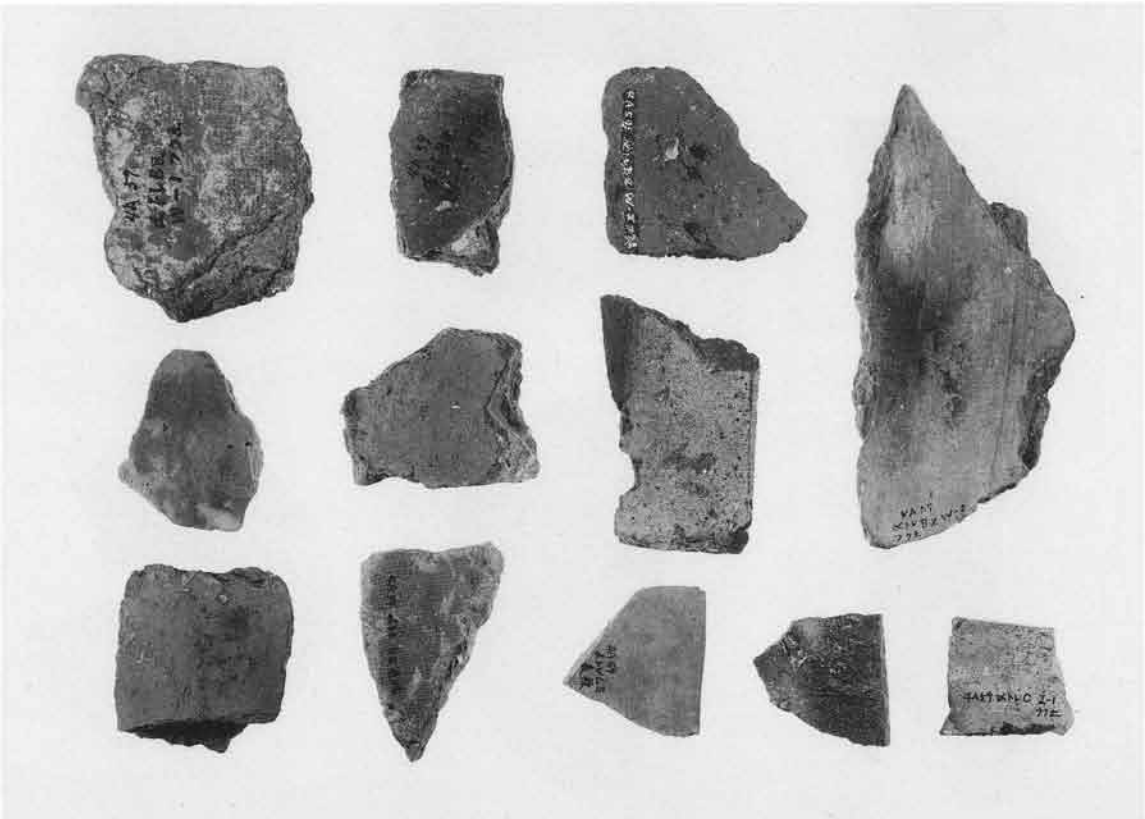

19
(I−1)

21
(I−1)

24
(I−1)



1．削器，敲石，磨石，砥石，板碑



2．瓦

調　査　要　項

遺跡名称	元総社明神遺跡（もとそうじみょうじんいせき）
遺跡記号	4 A59
遺跡所在地	群馬県前橋市総社町総社3,577－1番地ほか
調査期間	平成4年5月6日～平成4年7月22日
調査面積	714㎡
開発面積	275,000㎡
調査原因	土地区画整理事業
調査依頼者	前橋都市計画事業元総社(西部第三明神)地区土地区画整理事業 施工者　前橋市　代表者　前橋市長　藤嶋　清多
調査主体者	前橋市埋蔵文化財発掘調査団　団長　有坂　淳
事務局	事務局長　町田　重雄　事務局次長　高橋　正男 財政係員　高橋　賢靖　井上　敏夫 庶務担当　須田みずほ　小淵　恵子
調査担当者	狩野　吉弘　大山　知久
調査参加者	石田　洋子　岩木　賢一　岩木　操　大田　一郎　岸　フクエ　近藤　俊男 須藤　恒雄　住谷　文彦　富沢　清八　渡木　秋子　湯浅たま江　湯浅　政夫 湯浅　道子　湯浅　有紀
調査協力	群馬県教育委員会文化財保護課　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　区画整理第一課 群馬町教育委員会 飯島　静男　大江　正行　加部　二生　木津　博明　近藤　滋　早田　勉 中井　正幸　増田　次郎 井上測量株式会社　有限会社古環境研究所　たつみ写真スタジオ　宮下工業

（五十音順　敬称略）

元総社明神遺跡 XI

平成5年3月15日　印　刷
平成5年3月20日　発　行

編集発行　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
前橋市上泉町664－4
TEL　0272-31-9531

印　　刷　株式会社　開文社印刷所